檢閱濟

中國文學史

弘文館著

東京 弘文館發行

凡例

一本書は、師範學校、中學校、高等女學校等の教科用として編述したるものにて、在來の文學史とは、聊か其の體裁を異にせり。元來、文學史は、一の專門的學科に屬するものなれば、これを普通教育に應用せんこと、至難の業といふべし。されど、文學史を授くるは、單に歌文の由來發達を知らしむるのみならず、これによりて、國民志想の變遷せる次第をも、知らしむるものなれば、亦極めて必須の學科なり。本書を編述するに當り、已むことを得ざるものゝ外は、總べて教授の實地に考へ、中學程度の生徒に對して、尤も適切と覺ゆる材料につきて選擇取捨し、理論の高尚なるものゝ

如きは、固よりこれを省略したり。

一本書、各時代の區劃は、通常歴史の分類に從へり。文學の變遷も、政治宗教等の消長と、相關聯する所、甚多きを以て、別に授けらるゝ所の國史と共に、生徒をして、相須ちて、發明する所あらしめんとてなり。

一我が國の文學に及ぼせる漢學の影響は、極めて大なるものなれば、各時代の總説中に於て、その渡來以後の發達變遷の大概をも併せ説けり。

一上古の文學につきては、ここに簡畧に叙述したり。これ、あまりに古樸幽遠にして、生徒をして、容易に悟らしめ難き所、尠からざるを以てなり。その用例の如きも、教授者の取捨に一任す。

一鎌倉時代の戰記文隨筆文等を始め、以下江戸時代の漢學者の和漢混和文等は、大概、現時の中學國文讀本中に網羅せられたれば、その部分にかぎりては、故らに文例を省略したり、重複を厭ひてなり。

一各時代の下に、その種類によりて、歌文の例を區分して掲げたるは、著者、多年の授業上の經驗によれるものにて、強ちに、體裁に拘泥あたるにあらず。

一各時代の末毎に挿入したる著作目表は、その重なるものの中より、一班を掲げたるに過ぎず。これ本文中に於て、各書の解題等を叙述せんは、徒らに繁雜に流れ、生徒をして飽かしめんことを恐れてなり。もし本文の不足生じたる場合には、教授者本表を以て、其の缺漏を補成せられんこ

こを望む。

一表中の年代には、往々不明なるものあれば、概ねその著者の生歿年代、又は存世中のある年代を以て充てたり。これ又、已むを得ざればなり。

一江戸時代に於ける小説の類は、その説明を省略し、併せて用例をも省けり。

一編中、往々分類に苦めるところあらざれども、只初學の解し易きを主として、適當なりと覺ゆる箇條中に編入したるあり。

一著者、學淺く識足らずして、誤謬錯亂せる所多かるべし。謹みて大方の是正を俟つ。

著者識

中學國文學史目次

緒説……一

第壹編　上代の文學

第一章　總説……五

第二章　歌謡……十二

第三章　散文……十六

祝詞　奏詞

第二編　奈良朝時代の文學

第一章　總説……二十三

第二章　散文……二十五

古事記　氏文　風土記　宣命

第三章　歌……三十二
（著作目表）

第三編　平安朝時代の文學

第一章　總說……三十九
第二章　散文……四十四
物語　日記　隨筆　史傳　序文
第三章　和歌……七十二
第四章　舞曲朗詠……八十
神樂歌　催馬樂歌　今樣　朗詠
（著作目表）

第四編　鎌倉時代の文學

第一章　總說……八十五

第二章　散文……八十八
戰記　隨筆　日記紀行　雜史　消息文
第三章　和歌……九十九
（著作目表）

第五編　室町時代の文學

第一章　總說……百七
第二章　散文……百十
隨筆及び雜著　雜史
第三章　和歌及び連歌……百十九
第四章　謠曲……百二十三
（著作目表）

第六編　江戸時代の文學

第一章　總說……百二十九

第二章　漢學者の和漢混和文……百三十三
教訓文　歴史文　雜著文
第三章　國學の復興及び國學者の輩出……百三十九
第四章　國學者の散文及び和歌……百四十六
第五章　俳諧俳文及び狂歌狂文……百六十
第六章　戯曲及び小説……百六十九
（著作目表）

中學國文學史目次終

中學國文學史

弘文館著

緒説

文學史は、文學の起原、發達及び變遷を、講明する一種の歴史なり。

文學は、何れの國にても、皆、その國民の特性、風土、政治、宗教等に伴ひて、各、起原、變遷を異にするものなり。されば、國異なるに從つて、文學もまた異なること、もとより言を俟たず。なほ、一國内の文學につきても、政治の變動、もしくは、外來事物の刺激等によりて、多少の變遷あるを免れず。抑、我が國は、古來、

浦安の國と稱し、上に萬世一系の皇室あり、下に忠君愛國の臣民ありて、終古一貫、かはる所なき國體なり。加之、天然の風景に富み、氣候の溫和、山川の秀麗、衣食の豐富なる樂土たれば、人心、また敦厚にして、優雅なり。故に、因りて起る所の文學も、比較的優雅にして、他國の如く、峻嚴なる點殆と鮮し。而して、その優雅なる點は、たゞに、文學のみに留まらずして、美術、工藝等、皆然らざるはなし。これ卽ち、我が特性にして、他に比類なき所なり。

文學の盛衰は、時世の隆替に伴ふものなれば、今、便宜上、我が上下三千年間を、左の六期に區劃して、その發達、變遷の次第を知らしむべし。

第一期　神代より、神武天皇の御代まで、これを上代と稱す。

第二期　持統天皇の御代より、桓武天皇の御代まで、これを奈良朝時代と稱す。

第三期　桓武天皇の御代より、後鳥羽天皇の御代まで、これを平安朝時代と稱す。

第四期　後鳥羽天皇の御代より、後醍醐天皇の御代まで、これを鎌倉時代と稱す。

第五期　後醍醐天皇の御代より、後陽成天皇の御世まで、これを室町時代と稱す。

第六期　後陽成天皇の御代より、孝明天皇の御代まで、これを江戸時代と稱す。

以上六期中、通常の歷史にては、前三期を、王朝時代と稱し、後

三期を、武家時代と稱せり。文學の上に於ても、なほ然り。王朝時代の文學は、その行はるゝ處、おほくは貴族社會にありしが、武家時代に至りては、漸く下流に移り、廣く一般に行はるゝに至れり。これ、政體の變動に伴へる現象にして、文學の發達上、亦然るべき勢なり。以下、各時代につきて講明すべし。

第一編　上代の文學

第一章　總說

上神代に起り、下紀元千三百四十六年まで、即ち天武天皇の御代の末年に至る。

この時代には、我が國の文化、未だ熟せず、外國の影響を蒙ること少く、社會の狀態も、從つて簡樸なりき。されば、古事記、日本紀中に散見せる歌謳の類、延喜式、その他に見えたる、祝詞、壽詞の類の外には、此の時代の文學として見るべきもの、殆ど少し。而して、是等とても、後世の如く、文字によりて、書き綴りたる物にあらず、たゞ、口々に言ひ傳へたるものなれば、中には、轉訛せるものなきにあらざれども、大體に於いては、その眞を見るべきこと疑ひなし。

今、この時代の文學を、述ぶるに當り、まづ、上古文字の有無、及び漢學佛教の渡來の事を述べ、次に、歌謳、祝詞等につきて說明すべし。

上古の文字　この事につきては、古來諸說ありて一定せず。あるは、上古は、貴賤老少、悉く口々に相傳へ、前言往行して忘れざりければ、別に、文字といふものなかりきといひ、あるは、上古すでに龜卜の術あり、文字なくして、爭でか、この術を行ふことをえん。世に傳へて、神代文字と稱する、日文、天名鎭地などは、上古の文字なりといひて、各、その有無を主張せり。されど、これ等の說、强に信じ難し。その他、天武天皇は、境部連石積をして、新字四十卷を作らしめ給ひし由なれども、今に傳はれるものなければ、その如何なる物にてありしかを、知るによしなし。要するに、上古は、語部といふものありて、故事を傳唱したれば、文字の要、殆どなかりしならん。果して然らば、文字ありとも、廣く、一般の記錄等には、用ひらるゝことあらざりしなるべし。故に、我が國にて、始めて、文字を以て記載せるものは、即ち、漢字の音訓をかりて綴りたる、古事記にてありしなり。

漢學の渡來　我が國の、海外と交通せしことは、極めて、上古にもありといへど、その文學の渡來したるは、紀元九百四十年代、即ち應神天皇の御代なり。天皇の十五年、百濟の王子阿直岐來朝し、次ぎて、彼の國の博士、王仁來り、論語十卷、千字文一卷等を獻ぜり。皇太子稚郞子、王仁を師として、經典を學びたまひぬ。これ、漢籍渡來の初めにして、神武天皇卽位後、九

百四十六年の事なりき。

抑、我が國三韓との交通は、はやく神代にあり。されば、漢籍渡來の前にも、多少、彼の國の風俗、習慣を見聞したれば、上流の人には、やゝ、文字の意義をも、解する者ありしなるべし。而して、その渡來以後は、漢學は、年と共に進歩せしかど、これを修むる者は、未だ、我が國人には少くして、書を讀み文を綴るものの、おほくは、三韓の歸化人、若しくは、其の子孫にてありき。故に、當時、歸化人及び其の子孫は、各、朝廷に重用せられ、王仁等の後は、史部と稱して、世々文筆に從事したりき。履仲天皇の四年には、諸國に史官をおきて、民庶の言事を記さしめ、雄略天皇の御代には、東西の史部をして、朝廷の出納を錄せしめ、欽明天皇の時には、王辰爾をして、船賦を錄せしめ給ひし等、史に見えたれば、社會の進歩と共に、文筆の業、愈、必用なりしを知るべし。されば、學者は、素より諸藝の博士等の、三韓より來朝するもの多く、遂に、推古天皇の御代に至りては、進みて、隋と、直接の交通を開くに至れり。天皇の十五年に、小野妹子を隋に遣はし給へるは、實に遣唐使の最初なり。又、この時、留學生、學問僧の、入唐せしもの者おほかりき。以後、彼我の交通頻繁にして、文學技藝より、あらゆる百般の事物をも輸入せしかば、我が國の文化に、長足の進歩を促がしたり。高向玄理、南淵請安、僧旻等は、實に當時の英才を以て、彼の國に留學したるものなり。さて、これ等の人々、歸朝してより後は、新智識を、實地に應用したる結果として、大化の改新となり、尋いで、天智天皇の御代には、學校の設けさへありき。かくて、益、漢學

は奬勵せられ、各種の專門學科も行はるゝに至れり。これ、我が國、文化進歩の一段なり。

すでに述べたるが如く、漢字渡來の初期に於いては、未だ、國人にして、文を綴るものあらざりき。推古天皇の時に及び、厩戸太子の、憲法十七ヶ條を草し給へるは、漢文の始めなり。その他、道後の温泉の碑、又、佛像の銘等、今日に傳はれるもの少からず。されど、これ等の漢文は、未だ、拙劣の評を免れず。この時代の中ごろよりは、漢文を綴ることおほきと共に、一方には、彼の口語に傳へたりし故事をも、漢字の音訓をかりて、記すことさへ發明せられぬ。これ實に、我が固有の文學に、一生面を開きたるものにして、文學旺盛の端緒は、已にこゝに開けたり。

佛教の渡來　漢學の渡來後、二百三十四年を經て、欽明天皇の十三年、卽ち紀元千二百十二年に至り、百濟王、佛像及び經論を獻ず。是より先、繼體天皇の御代に、佛像の渡來ありといへども、素より公然の事にてはあらず。抑、佛教は、元、印度に起り、支那三韓を經て、我が國に傳はれり。故に、その經論も、皆、漢字を以てしたれば、佛教の流行は、傍、漢學を奬勵して、我が文學上に、一大影響を及ぼせり。

それ、我が國は、太古以來、祭政一致の俗にして、敬神の志厚く、忠孝を以て心とせり。未だ、因果應報の理等を、說くものあらざりき。この風習は、漢學渡來後といへども、尙、變ずることなかりしかど、佛教渡來の後は、甚しく、我が人心を變動せしめぬ。これ、その教法の、我が國風に、異なる所ありしを以てなり。

ことに、既戸太子の、力をその興隆に盡したまひし如きは、よく上下の人心を風靡せしめ、佛教をして、當時の社會に、一大勢力を振はしむるに至れるものなり。

佛教益盛なるにつれて、文學は更なり、百般の事物、その影響を蒙り、人情風俗も變化し、彼の漢學の隆盛と共に、次朝以降の文化を現出せしめたり。

第二章　歌謳

上古、人文の未開なりし時代には、各自口々に、前言往行を傳へるたること、既に述べたるが如し。故に、その言辭は、自ら口誦し易く、記憶に便なりしこと、素より當然なり。これ、歌謳の、散文に先ちて起れる所以なり。まづ爰に、當時代の歌謳の、古

事記、日本紀中に散見せるものにつきて、説明すべし。

抑、記紀は、何れも、漢字を以て、上古の事實を記したるものにて、ここに、日本紀は、華麗なる漢文を以てせり。さるを、この書中の歌謳のみは、皆、漢字の音をかりて記されたれば、その書の撰修は、次期にあれども、太古以來の口誦のまゝなるを以て、こゝに掲ぐる所以なり。

素盞男尊の、須賀の宮造の時、雲の立るを見て詠み給へる歌、

夜久毛多都。伊豆毛夜幣賀岐。都麻碁微爾。夜幣賀岐都久流。
曾能夜幣賀岐袞。

と、あるを始めとし、大已貴命の詠みたまへる、長歌數首あり。之を古來、短歌及び長歌の濫觴とせり。かくて、記紀中の歌、大凡二百首ありて、その句法は、後世の如く、五七五七と交錯せ

るものゝみならず、中には、四字六字の句、若しくは十一字に及べるもあり。されど、全體より見れば、五七の調多し。これ、我が國の歌調は、全く、五七より起れるを知る。神代には、神々の歌尠からざれども、神武天皇より後に至りては、歷代の天皇、皇后、皇子の詠多く、又、作者知れざる童謠等もあり。要するに、この期には、貴賤の別なく、皆歌を詠じたりき。これ、歌と平常の對話と、その差異なかりしを以てなり。

神武天皇、兄猾を滅ぼし給ひし時、弟猾盛饗を設けて、皇軍に奉りたれば、天皇これを軍卒に班ちて、謠ひ給ひし御歌。

菟田の高城に、鳴鵠はる、我が待つや、鳴はさやらず、いすくはし、
鯨さやる、こなみが、な乞はさば、立ちそばのみの、なけくを、
こきしひゑね、うはなりが、な乞はさば、いちさかきみの、多けくを、

こきだひゑね。（古事記）

（原書には漢字にて記したれど今假名書に改めたり以下是に倣ふ）

又、天皇、登美彦を擊ち給はんとて、謠ひ給し御歌。

みつ〳〵し　久米のこらが　粟生には　かみら一本
そねがもと　そねめつなぎて　うちてしやまむ（同）

飾の臣が、誅せられしを悲しみて、影姫の謠ひし歌。

石の上　ふるを過ぎて　こもまくら　高はしすぎ
物さはに　大宅すぎ　春の日の　春日を過ぎ
つまごもる　をさほを過ぎ　玉けには　飯さへもり
玉もひに　水さへもり　なきそばちゆくも　かげ媛あはれ
（日本紀）

皇極天皇の御代の童謠

をちかたの　粟野のきゞし　とよもさず
われはねしかど　人ぞとよもす（仝）

右の中、神武天皇の御歌の如きは、巧緻ならざるうちに、眞率なる精神あり、單純なるうちに、雄大なる思想あるを認め得て、太古のおもかげを追想すべきなり。すべて、上代の歌は、みな天眞爛熳にして、事物に拘泥せず、目前の風景によりて、その感情を表すを常としたれば、やゝ、露骨に過ぎたるものおほかりしは、素より怪むにたらざるなり。又、かゝる簡單質素なる、當時の歌にも、自然に、一種の修飾法ありき。そは、盛に譬喩を用ひ、枕詞を冠らせ、倒句を用ひたる等なり。これ、もとより歌の特色なれば、等閑に看過すべからず。

第三章　散文

この時代の散文として、論ずべきは、まづ、古事記、日本紀、風土記中の一部分、及び祝詞、壽詞の類なり。されど、その體、歌謳と隔たる所遠からず。これ、屢、前に述べし如く、口語のまゝを、記したるに因りてなり。

抑、記紀、風土記は、何れもみな、次期に成りたるものなれども、その記載の事實は、太古以來の傳說なれば、その一部分の言辭と思想とは、全く、撰修當時のものにあらざるなり。これによりて、吾人は、我が文學の、後世に至れる、經過の狀をも知り、かつ、その起原の眞相をも知ることを得るなり。

大國主神の天神に奏上せし詞

是の我が燒れる火は、高天原には、神產巢日御祖の命の、登陀流天の新巢の凝烟の、八拳垂るまで燒き擧げ、地の下は、底津石根に燒き凝らして、栲繩の千尋繩打ち延へ、釣らせる海人が、口大の尾翼鰭、佐和々々に、控き依せ騰げ

て、打竹の登遠々登遠々に、天の眞魚咋獻らんとまをしき。（古事記）

國引の傳說

國引き坐せる、八束水臣津野命の詔りたまはく、八雲立つ出雲の國は、狹布の稚堆國なるかも、初國小ひさく作らせり。かれ、作り縫はむと詔りたまひて、栲衾志羅紀の三崎を、國の餘り有りやと見たまへば、國の餘り有りと詔りたまひて、童女の胸鉏取らして、大魚の支太衝き別けて、波多酒々支穗振り別けて、三身の綱打ちかけて、霜黑葛闇那々々に、河船の毛曾呂々々に、國來々々と引き來、縫へる國は、去豆のさきより絕ちて、八穗爾支豆支の御埼なり。此を以て堅め立てる加志は、石見の國と出雲の國との堺なる、名は佐比賣山これなり。（出雲風土記）

右の文等の、思想廣大にして、その修飾法の尋常ならざる所は、實に、この期の文學の特色にして、又よく、我が固有の美風をも表顯せるものなれば、その深意のあるところをも玩味すべし。

祝詞　告說言の意にて、神祇に告げ申す詞なり。されば、聲調の、優美ならんことを務め、言辭を修飾し、對句を設け、比喩を巧みにせる所、他の文と異なる點多し。天照大御神の石戸隱りの時、天兒屋根命の奏し、太祝詞は、いかに美はしかりけん、今日に傳はらざれば知るによしなし。而して、祝詞の、今日に傳はりたるは、延喜式に載せられたるもの、凡三十篇なり。其の中、最も古く、名文と稱せられたるは、祈年祭、大殿祭等の詞なり。これ等の詞につきては、諸說あれども、この時代の作なること疑ひなし。

壽詞　吉言の意なり。これは、往昔、天皇の卽位式、大嘗會の時などに、舊事を述べ、美辭を陳じて、奉祝せし詞なり。延喜式

中なる出雲國造の神賀詞、台記（藤原頼長の日記）中なる中臣の壽詞などは、その極めて古きものなり。また億計、弘計二王の、流離中にものしたまへる室壽詞には、善言をつらねて祝したり。而して、これ等の文の結構、大概、祝詞に近きものなり。

祈年祭祝詞の一節

ことわきて、伊勢にます、天照大御神の大前に白さく、皇神の見はるかします、四方の國は、天の壁立つきはみ、國のそきたつかぎり、青雲の靄くきはみ、白雲の墜りゐむかぶす限り、青海原は棹柁ほさず、舟のへの至り留まるきはみ、大海原に舟滿ちつゞけて、陸より往く道は、荷の緒ゆひかためて、磐根木根ふみさくみて、馬の爪の至りとゞまるかぎり、長路ひまなく立ちつゞけて、狹き國は廣く、さかしき國は平らけく、遠き國は、八十綱打ちかけて、引きよする事の如く、皇太御神の寄さしまつらば、荷前は、皇太御神の大前に、横山の如く打ち積みおきて、殘りをば、平らけくきこしめさむ。又皇御孫命の御世を、手長の御世と、堅磐に常磐に齋ひまつり、茂しの御世に、幸へまつるが故に、皇吾睦神漏伎神漏彌の命と、うじものうなね衝き拔きて、皇御孫の命の宇豆の幣帛を、たゝへごとをへまつらくと宣る。（延喜式）

新室壽詞

築き立つるわか室葛根、築きたつる柱は、此の家ぎみの御心の鎮なり。取り舉ぐる棟梁は、此の家長の御心の林なり。取り置ける椽橑は、此の家長の御心齊なり。取りおける蘆葺は、此の家長の御心の平なり。取りゆへる繩葛は、此の家長の御壽のかためなり。取り葺ける草葉は、此の家長の御富の餘なり。出雲は新墾、新墾の十握稻の穗、淺甕にかめるおほみき、美らに飲喫哉、あこたち。あしびきの、此の傍山の牡鹿の角、さゝげて吾が儕へば、旨酒餌香の市に、直以て買はず、手掌もやらゝに、拍ち上げ賜へ、吾がとこよたち。（日本紀）

祝詞の文は、かくの如く、その思想雄大にして、その語調嚴正

なり。抑、祭政一致なりし當時に於いては、祭事を以て、國家重要の務とし、之を世職とせし、中臣、齋部の二氏は、常に、人臣の上位にありき。一般の事物、未だ發達せざりし世にありても、特に、祭事のみは、鄭重に行はれたれば、他の歌文よりも、この種の文は、既に早く發達せり。當時の歌は、概して、その規模小なりしを、次期に至り、人丸、赤人等出づるに及びて、詠歌の上に、一段の光彩を加ふるは、この祝詞より來れるものと知るべし。

第二編　奈良朝時代の文學

第一章　總說

持統天皇……桓武天皇
紀元一三四六……一四四三

この時代は、大化改新の後を承けて、制度文物、皆、唐制模倣の世なれば、文學も、著くその影響をうけたり。此の時代に於て、特に見るべきものは、まづ、詠歌の發達なりとす。そは、大概、萬葉集に載せたり。又、古事記、風土記等の文、及び祝詞、宣命等のうち、この期の文として、見るべきもの少からず。今、これ等歌文を說明するに先ち、當時の世の狀態を略說せん。

孝德天皇、大化改新の政を行ひ給ひしより、天下の形勢、頓に變じ、百般の事物は、悉く、唐風を模倣するに至る。かつ、歷代の

天皇も、皆、意を文敎に注ぎ給ひければ、漢學の隆盛益、加はりぬ。天智天皇の御代には、學校を設けたまひ、大寶の制定まるに及びては、大學を京都におき、國學を地方に設け、紀傳、明經、明法、算の四道の科を定め、各、專門の學を修めしめたり。爾來、碩學名儒輩出して、濟々たる多士朝に滿てり。當時、佛敎も益、盛にして、聖武、孝謙の御代には、諸國に國分寺を置きて、普く敎法を布き給へり。されば、漢學、佛敎は、ともに人心を支配して、優柔浮華の風漸く起り、文學上にも、その影響を及ぼせり。當時、人丸、赤人、安麿のごときありて、文學界の曉星となり、歌文進歩して、はてには、文華秀麗の平安時代を、この次期に見るに至りぬ。

すでに、前期に於て、稍發達せし漢學は、此の時に於いて、愈、その歩を進め、詩、文を作ること、漸くおほくなりぬ。大友皇子、大津皇子の如きは、尤も作詩に巧みなりき。加之、國史、地誌の撰修の擧さへあり、中にも、日本紀の如きは、我が國の正史たる、六國史の第一にして、史家の要書たり。而して、この時期中、尤特書すべきは、萬葉假名、及び片假名の創作にして、これ大に、文學上の進運を速かにせり。

第二章　散文

この期の散文は、まづ、古事記、氏文、風土記の文、及び祝詞、宣命の文等なり。されど、古事記、風土記、祝詞中の一部は、すでに、前期中に説明せり。爰には、たゞその書の來歴のみを述ぶべし。

古事記

この書は、元明天皇の和銅五年になり、その書三

卷、上開闢より、下推古天皇、までの故傳說を記せり。是より先、史籍撰修の擧ありといへども、今に傳へざれば、我が國史は、これを以て初めとす。此の記は、先に、天武天皇、我が古傳說の亡びんことを憂ひ、親ら、謬りを削り、實を正して口授し給へるを、稗田阿禮、强記にして、よく之を傳誦したりしが、その後、元明天皇の朝、太安麿、勅を奉じて阿禮が口誦する所を記述せるなり。その躰裁、漢字の音訓を假りて、古語を記したるものなり。故に、その文、修飾の點少く、極めて樸質なる間に、却て異彩の燦然たるものあり。その撰者の苦心經營の蹤は、自序を見てもしらるべし。この記の文、上卷は、諸神の對話、及び古傳を直寫したるもの多ければ、殊に古雅なり。その中卷以下に至りては、記述の事實新しきと共に、まゝ漢文調を帶びたる所あり。

氏文　こは、家々の傳說を記したるものなり。當時、この種のもの多かりけんも、今傳はれるは、高橋氏文のみなり。こは、同氏の祖、岩鹿六雁命の事蹟を記せるものにて、その文の古雅眞率なる所、古事記に亞ぎて見るべきものなり。

風土記　元明天皇の和銅六年、諸國に令して、郡鄕の地位、產物、古傳說等を記して、奏上せしめたまへり。これ、即ち風土記なり。されど、今は大方亡びて、僅かに、常陸、出雲、播磨、肥前、豐後等のものゝみを存せり。さて、その文體は、大概、漢文によりたれど、中には、往々古語を以て、故傳を記せるものあり。上に引ける出雲風土記の文の如き、その尤、古きものなり。

宣命　こはもと、天皇の詔命を宣るといふ義なり。當時、普

通の勅書には、皆漢文を用ひ、國家の大事、もしくは、皇室に關する事件には、國文の勅書を用ひられたり。然して、この宣命體の詔書は、上代にもおほかりけんを、彼の日本紀なるは、皆漢文に譯せられたれば、今にして、その眞を窺ひがたし。されば、續日本紀に見えたるものを、この種の文の初めとす。續日本紀は、桓武天皇の延曆十三年になれり。全體は漢文なれども、たゞ宣命のみを、元の儘に挿入せられたるは、この書の奇觀にして、これ撰者苦心のあるところ、また文學上の美擧と稱すべし。

高橋氏文の一節

掛けまくも畏き、巻向の日代の宮に、天下知しめしし、大足彦代別天皇、(景行)五十三年癸亥八月、まへつきみだちに宣りたまはく、朕うつしき御子を思ふこといつかも止みなむ、小碓王のむけたまひし國々を、巡らむと思ふとのりたまひき。

此の月、伊勢にいでまし、うつりて東の國に入りましき。冬十月、上總の國安房の浮島の宮にいたりましき。その時、磐鹿六雁命、みともつかひき。天皇、葛飾野にいでまして、御獵せしめ給ひき。大后八坂姫は、假宮にまし〳〵、磐鹿六雁命も留り侍ひき。

此の時、磐鹿六雁命に宣り給はく、此の浦にあやしき鳥の聲聞ゆ。それかぐ〳〵と鳴けり。その形を見まく欲りすと宣ふ。すなはち、磐鹿六雁命、船に乘り、鳥の許に到れば、鳥驚きて巽浦に飛びき。なほ、おひ行けども、遂にえ捕らず。こゝに、磐鹿六雁命詔ひけらく、汝鳥よ、其の聲を蓋ひて、貌を見まくほりするに、巽浦に飛び還りて、其の形を見しめず。今より後、陸にえあがらざれ。若し大地の下に居らば、必ず死なむ。海中をもて住處とせよ。還る時、艇をかへり見れば、魚多くおひ來。すなはち、磐鹿六雁命、角弭の弓もて、浮べる魚の中に當てしかば、すなはち、弭につきて出で、忽ち數多得つ。かれ名けて頑魚といふ。これ、今の諺に堅魚といふ。

船潮の涸るゝにあひて洲の上に居ぬ掘り出でむとするに八尺の白蛤一つを得つ磐鹿六雁命その二種の物を捧げて大后に獻りきずなはち大后ほめ給ひ悅び給ひて宣給はく、いとうまく清く作りて御食つかへまつらむと欲りすと宣給ひきその時磐鹿六雁命まをさく六雁が作らせて獻らむと申して武藏の國の造が遠つ祖大多毛比秩父の國の造が遠つ祖天上腹天下腹人等を喚ばしめて膾に作り又煮燒し種々作り盛りて河曲山の桃の葉を見て高次八つに差し作り眞木の葉を見て平次八つに作りて日蔭を取りて鬘とし蒲の葉をもて髻をまき眞柝の葛をとりて手繦にかけ帶にし足結をゆひてくさ〳〵の物を結ひ飾りて天皇御獵より還り入ります時に仕奉らむとす。（下略）

文武天皇即位の宣命（元年丁酉八月）

現御神と大八島國知ろしめす天皇大命らまと詔り給ふ大詔を集侍皇子等王臣百官人等天下の公民諸聞こし食さへと詔る高天原に事始めて遠天皇祖の御世中今に至るまでに天皇御子あれまさん彌繼々に大八嶋國知らさん次ぎてと天津神の御子ながらも天にます神のよさしまつりしまに〳〵聞こし看し來る此の天津日嗣高御座の業と現御神と大八嶋國知ろしめす倭根子天皇命の授け賜ひ負せ賜ふ貴き高き廣き厚き大命を受け賜はり恐みまして この食す國天の下を調へ賜ひ平らげ賜ひ天の下の公民を惠み賜ひ撫で賜はむとなも神ながら思ほしめさくと詔り給ふ天皇大命を諸聞こし食せと詔る是を以て百官人等四方の食國を治め奉れと任け賜へる國々の宰等に至るまでに天皇が朝廷の敷き賜ひ行ひ賜へる國法を過ち犯すことなく明き淨き直き誠の心を以ちて彌すゝみて緩み怠ることなく務め結りて仕へ奉れと詔り給ふ大命を諸聞こし食さへと詔る故此の狀を聞こし食し悟りて歎しく仕へ奉らん人は其の仕へ奉れらむ狀のまに〳〵品々讃め賜ひ治め賜はむものぞと詔り賜ふ天皇が大命を諸聞こし食さへと詔る。（續日本紀）

右の文中宣命文の流暢閑雅なるは傳宣の際聽者を感動せしめんと務めたればなり。而して宣命と祝詞とはその文體

相似て、大に趣きを異にせり。祝詞は、神祭に用ふれば、務めて古風に、準則するを主とし、宣命は、王臣庶民に宣傳すれば、つとめて當時の通語を用ひて、一般に解し易きを主としたり。中にも、この期の中頃よりは、漢語佛語をさへ交ふるものあるに至れり。

第三章　歌

この時代の歌は、萬葉集二十卷に載せられたり。集中には、上、仁德天皇の皇后の御歌を始め、下、桓武天皇の朝まで、長短合せて四千五百餘首あり。されど、上代の歌は、僅々數十首を出でざれば、概して、この時代の歌なりとゐるべし。その撰者は、橘諸兄なりといひ、又、大伴家持なりといへど、思ふに、諸兄まづ前に撰びて、家持後に增補したりとの說、その眞に近かるべし。

萬葉集は、上下三百年の歌を蒐集し、その體裁、凡て、雜歌、相聞、挽歌、譬喩、四季の五部に分ちたり。されど、後の撰集の如く、精細なる分類あるにあらず。又、その歌體も、同一軌中に包まれたるものにあらず。縱橫自在にして、意氣奔然たるものおほし。實に、當時の人情を、窺ひ知るに餘りあり。

集中の歌は、悉く、漢字の音訓を假りて寫したり。これを、後世より、萬葉假名と稱す。抑、漢字の音を以て、歌を記すことは、已に、記、紀に例あり。されど、萬葉假名の用法は、變化自在にして、最も巧妙なるものなり。これ、漢字の應用上、一段の進步といふべし。その假名の用法は、たとへば、阿、安をア、春草をワカク

サ、留鳥をアミ、惡氷木をアシヒキ、不開有之をサカザリシ、山上復有山をイデと訓めるが如し。今まづ、短歌一首につきて、この用例を示さん。

持統天皇御製歌

春過而。夏來良之。白妙能。衣乾有。天之香來山。

さて、集中の歌は、上は、天皇皇族の詠より、下は、海人樵夫の作までを網羅せり。されば、巧拙等しからず、雅俗混じたりといへども、概して、上下の人、皆、歌をよむに長けたるは、その歌語の普通語と、未だ隔あらざりしを以てなり。

當時代の歌人中、柿本人麿、山邊赤人の二人は、特に有名なりき。人丸は、赤人が上に立ちがたく、赤人は、人丸が下に立ちがたしとは、次期の歌人、紀貫之の評言なり。かくて、人丸は、持統文武の兩朝に仕へ、赤人は、やゝおくれて、聖武の朝に仕へたる人なり。その身、共に微賤なりければ、事蹟傳らず。その他、山上憶良、大伴旅人、同家持、女流には、大伴郎女、坂上郎女など、皆有名なり。今、長歌、短歌、數篇を擧げて、その大概を知らしむべし。

近江の荒れたる都を、過ぐる時よめる。　柿本人麿

玉たすき　畝傍の山の　橿原の　ひじりの御世ゆ
あれまし、　神のことゞ　つがの木の　いやつぎ〳〵に
天の下　知ろしめしゝを　空に見つ　大和をおきて
あをによし　奈良山をこえ　いかさまに　思ほしめせか
天ざかる　ひなにはあれど　いはゞしの　近江のくにの
さゝなみの　大津の宮に　天の下　まろしめしけむ
すめろぎの　神の御ことの　大宮は　こゝと聞けども

大殿は　こゝと云へども　春くさの　ゑげくおひたる
霞たつ　春日のきれる　もゝしきの　大宮どころ
見れば悲しも

反歌

さゝなみの　滋賀の辛崎　さきくあれど
樂浪の　大宮人の　ふね待ちかねつ
ゑがのおほわだ　よどむとも
昔の人に　またも逢はめやも

神龜元年甲子冬十月五日、紀伊國に幸まし、時よめる。　山邊赤人

安見しゝ　わが大君　とこ宮と　仕へ奉れる
さひがぬゆ　そがひに見ゆる　沖つ島　清き渚に
風ふけば　白波騒ぎ　汐ひれば　玉藻かりつゝ
神代より　ゑかぞ貴き　玉つ嶋山

反歌

沖つ嶋　ありその玉藻　ゑほひ滿ち　おもほえむかも
いかくろひなば　かたをなみ
わかの浦に　汐みち來れば　田鶴なき渡る

葦べをさして　額田女王

天智天皇崩御まし、時よめる。　大御舟

かゝらむと　かねて知りせば　ゑめゆはましを
はてしとまりに　山上憶良

痾に沈める時よめる。

をのこやも　むなしかるべき　後の世に
かたりつくべき　名は立たずして

京に上る時、娘子の送れるに答ふ。　大伴旅人

ますらをと　思へるわれや　みづくきの
みづくきの上に　なみだのごはむ

題なし　大伴家持

さをしかの　あさたつ野邊の　あき萩に
玉と見るまで　おけるしら露
（萬葉集）

集中の歌を玩味すれば、概して、人丸は、長歌に巧みにして、赤人は、短歌に勝れたり。この二人は、思想、風韻、共に非凡にして、實に、その右に出づるものなし。而して、その非凡なる所は、彼の祝詞の、思想言辭等を捕捉し來りたればなり。讀者、今、これ等の歌を以て、彼の紀記中の歌に參照せば、その異なる點あるを曉るべし。

この集は、素より箇人の私撰なり。されど、後の勅撰集も、遠く、その編輯の規模を、この集に採れるを思へば、その、世に貴ばれたるも知らるゝなり。

第三編　平安朝時代の文學

第一章　總說

桓武天皇……後鳥羽天皇
紀元一四四四……一八四五

この時代は、前代の餘風を承け、社會益、進歩して、人文の隆盛なりしことは、上下三千年中、未だ比類なきところなり。而してその初期に於て、平假名創作せられてより、國語を寫すこと、一層の便を得て、物語、日記、紀行、隨筆、史傳等の諸體の文續出し、又、勅撰歌集、家々の集等、甚多し。

かくて、この期の文學は、藤原氏の盛衰に伴ひて、その消長あるを認む。これ、尤、心を留むべき要點なり。平安奠都の後に於ては、漢土の交通益、繁く、在來輸入の文物は、よく我が國風と

相融合し、彼の質樸なりし俗は、全く變じて、艶麗優美とはなりぬ。されば、文學もその影響を蒙り、前代に比して、著く、差異の點を見るに至れり。初め、藤原鎌足、不比等父子、ともに、律令撰定の功績ありてより、子孫、世々重職に任じ、就中、清和、陽成のころには、その勢威、漸々盛になり、一條、三條の御代に至りては、その專横、殆ど極に達せり、されば、是に伴ひて、驕奢の風甚しく、四季折々の宴、歌合、草合、繪合などの遊戯に至るまで、華美を競へり。是に於て、公卿大夫は、あげて優柔の風流子となりはて、倫道の頽廢、風俗の紊亂、愈甚しかりき。かくて、後三條の御代に至りては、藤氏の勢威漸く傾き、又、昔日の觀なく、以後、朝權、大に弛廢して、諸國の武士、勃興するに至れり。藤氏の盛衰、かくの如し。されば、文學もこれに伴ひて、最初百年間は、漢學獨り盛にして、次の二百餘年間は、日記、物語等おほく顯れ、後の百年は、少しく衰へんとして、又、變調を呈したり。漢學は、當期の初めに於て、著く進歩し、詩文を作ること多くして、凌雲集、文華秀麗集、經國集等の詩集をも勅撰せられたり。而して、當時尤も、世の嗜好に應ぜしは、文選、白氏文集等なりき。されば、官符、往復文に至るまで、皆、華麗なる漢文を用ひざるはなし。その他、國史撰修の擧、續いて起り、公私の學校整備して、官學には、大學、國學の設けあり、私學には、和氣氏の弘文院、藤原氏の勸學院、僧空海の綜藝種智院などありき。されど、その隆盛は、たゞ初期にありて、延喜、天暦以後に至りては、漸く、衰運に向ひたり。この時よりして、やゝ詩文を作ること衰へ、終に晩年に至りては、純粹の漢文ならぬ、一種特異の記

錄文と稱する文體、起るに至れり。

又、佛教は、此の期に至りては、人心を同化せしむること、一層深く、かつ、本來の教旨も轉じて、多少、我が國風に接近したれば、その流行愈盛にして、名僧智識もおほく輩出し、各弘布に力を盡せり。されば、その勢日に揚り、遂には、國家の事變天災等にも、僧侶をして、佛に祈請せしむるに至り、古來の朝儀漸く衰ふ。

以上、漢學佛教の隆盛は、當時の社會に至大なる影響を蒙らしめたり。そは、固有の美風を挫き、柔弱浮華に陷らしめ、延いて、纖巧なる文學を、顯出せしむるに至れるなり。

平假名創作　片假名の創作は、既に前期の末頃にありき。今、平假名と相比較して、これを講明せん。抑、假名は、もと漢字の音をかりたる、一の音表文字なり、而して、片假名は、漢字の冠、偏、傍などをとれるものなるが、そは、前期の末に、漢字の用法、大に發達して、その點畫の、繁雜なるを厭ひしより、誰作るともなく、かゝる字躰を按出せしなるべし。世に片假名は、吉備眞備の創作なりといへども否らず。眞備は、只、學問上より、五十音圖を配列したるに過ぎざるべし。要するに、片假名は、當時、使用者によりて、その字躰を異にし、又、未だ一般に行れずして、却て、平假名よりも、後に使用せられしなり。

平假名は、當期の初め、漢字の草躰を略書して、誰彼となく用ひたるに起れり。さるを、世に傳へて、僧空海の創作と稱するは、その博學、能書にして、彼の伊呂波歌を、この假名にて綴れるを以てなり。されば、この歌ありて、字躰、漸く一定せりといい

へども、今になほ、往々、異躰の文字を傳へたり。之を要するに、片假名、平假名は、社會の發達、文運の進歩上、自然の必用に促されて、起りたるものといふべし。

第二章　散文

この時代の散文には、物語、日記、隨筆、史傳、歌序等、その種類おほし。かく種々なる文體の、當期に現出せしは、彼の假名ありて、思想を陳ぶることの、自由なりしによれり。今、順次その例證を擧げて說明すべし。

物語　物語は、當期の散文中、最も早く發達せるものなり。その始めは、口語のまゝに、昔話を寫し出したるものにて、趣向も單純に、文章も眞率なりしかど、年月を經るまゝに、趣向愈、緻密に、文章益、華麗となり、はては、架空の想像をも加へて、巧みに、世態人情を描寫するに至れり。

竹取物語は、平假名を以て記せる、我が物語中の、尤古きものと稱せらる、その著者を、源順なりといふは詳かならず。されども、醍醐天皇の延喜以前になりたりといふ說、信ずべし。その文躰、古雅にして輕妙なり。全體の趣向は、竹取翁といふもの、赫哉姫てふ佳人を養ひければ、時の公達等の之を慕へるに、姫は、何れにも從はで、遂に、上天せしことを叙述したるなり。これ全く、想像の假說にして、佛經、漢籍中の故事より來れるものなり。

此の物語につぎて古きは、伊勢物語なり。こは、在原業平の歌集等を本として、何人か、之に加筆せしものなるべし。故に、そ

の躰裁は、たゞ歌序を、順序よく併列したる如き觀あり。文章、簡潔にして奇拔なる所、後人をして、羨望せしむるに餘りあり。なほ、この書の名につきては、古來諸說あれど定めがたし、

竹取物語の一節

車持皇子は、心たばかりある人にて、公には、筑紫の國に、湯あみに罷らんとて暇申して、かぐや姫の家には、玉の枝取りになむまかるといはせて、下り給ふに、仕うまつるべき人々、皆難波まで御送りしけり。皇子、いと忍びてとの給せて、人も數多率ておはしまさず。近うつかうまつる限りして、出で給ひぬ。御送りの人々、見まつり送りて、歸りぬ、おはしましぬと、人には見え給ひて、三日許ありて、潛ぎ歸り給ひぬ。豫て、事皆仰せたりければ、その時、一の工匠なりける內匠六人を召し取りて、容易く、人寄り來まじき家を作りて、構へを三重に爲籠めて、工匠等を入れ給ひて、皇子も同じ所に籠り給ひて、しらせ給ひつる限り、十六そをかみに、くどをあけて、玉の枝を造り給ふ。かぐや姫のたまふやうに違はず、つくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に竊に持て出でぬ。船に乘りて歸り來にけりと、殿に告げ遣りて、いといたく、苦しげなるさまして居給へり。迎へに人多く參りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひて持ちてまゐる。いつか聞きけん、車持皇子は、優曇華の花持ちて、上り給へりとの、しりけり。これをかぐや姫聞きて、我は、この皇子に負けぬべしと、胸つぶれて思ひけり。かゝる程に、門を叩きて、車持の皇子おはしたりと告ぐ。旅の御姿ながら、おはしましたりといへば、逢ひ奉る。（下略）

翁、皇子に申すやう、いかなる所にか、この木は候ひけん。怪しく麗しくめでたき物にもと申す。皇子答へてのたまはく、前昨年の二月十日頃に、難波より船に乘りて、海中に出でゝ、行かん方も知らず覺えしかど、思ふ事成らでは、世の中に、生きて何かせんと思ひしかば、たゞ空しき風に任せてありし。命死なばいかゞはせん、生きてあらん限は、斯くありきて、蓬萊といふらむ山に逢ふやと、浪にたゞよひて潛ぎありき、我が國の內を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ、海の底にも入りぬべく、或時は風につけて、知ら

ぬ國に吹き寄せられて、鬼のやうなる物出で來て殺さんとしき。或時には、來し方行く末も知らず、海にまぎれんとしき。或時には、いはん方なくむくつけなるもの來て、食ひかゝらんとしき。或時には、海の貝を取りて命を續く、旅の空に、助くべき人もなき所に、いろ〳〵の病をして、行方すらも覺えず。船の行くに任せて、海に漂ひて、五百日といふ辰の時ばかりに、海の中に、遙に山見ゆ。舟のうちをなんせめて見る。海の上に漂へる山、いと大きにてあり。その山のさま、高くうるはし。これや、我が覓むる山ならんと思へど、さすがに畏しく覺えて、山のめぐりを指し廻らして、二三日ばかり見ありくに、天人の粧したる女、山の中より出で來て、銀の金碗を持て、水を汲みあり く。これを見て、船よりおりて、この山の名を何とか申すと問ふに、女答へて曰く、これは蓬萊の山なりと答ふ。是を聞くに、嬉しきこと限なし。この女に、斯くの給ふは誰ぞと問ふ。我名は、ほうかむるりといひて、ふと、山の中に入りぬ。その山を見るに、更に登るべきやうなし。その山のそばつらを廻れば、世の中になき花の木どもたてり。金銀瑠璃色の水流れ出でたり。それには、いろ〳〵の玉の橋わたせり。そのあたり、照り輝く木どもたてり。その中に、この取りて持ちて、參うで來たりしは、いと惡かりしかども、のたまひしに逆はましかばとて、この花を折りて、參うで來たるなり。山は限りなくおもしろし。世に譬ふべきにあらざりしかど、この枝を折りてしかば、さらに心もとなくて、船に乘りて、追風吹きて、四百餘日になん參うで來にし。大願の力にや、難波より、昨日なん都にまうで來つる。さらに、潮に濕れたる衣をだに、脱き替へなでなん、かう參うで來つるとの給へば、翁聞きて、うち歎きてよめる。

呉竹のよゝのたけとる野山にも、さやはわびしきふしをのみ見し。

是を皇子聞きて、こゝらの日頃、思ひ詫び侍りつる心は、今日なん落居ぬるとの給ひて、かへし。

わが袂、けふかわければわびしさの、千草の數もわすられぬべし。

とぞ給ふ。

伊勢物語の一節

むかし、水無瀬にかよひ給ひし惟喬のみこ、れいの狩りしにおはします。御

ともに、うまのかみなる翁つかうまつりぬ。日ごろ經て、宮にかへり給ふげり。御おくりして、とくいなんとおもふに、おほみきたまひ、ろくたまはんとて、つかはさゞりけり。この馬の頭、心もとながりて、

枕とて草ひきむすぶこともせじ秋の夜とだにたのまれなくに。

とよみける。時はやよひのつごもりなりけり。みこ、おほとのごもらで明したまうてけり。

かくしつゝ、まゐりつかうまつりけるを、おもひのほかに、御ぐしおろし給うてけり。む月に、をがみたてまつらんとて、小野にまうでたるに、比枝の山のふもとなれば、雪いと高し。去ひて、御室にまうでゝ、をがみたてまつるに、つれ〳〵と、いと物がなしくて、おはしましければ、やゝひさしく侍らひて、いにしへの事など、おもひ出て聞こえけり。さてもさむらひてしがなとおもへど、公事ありければ、えさむらはで、夕ぐれにかへるとてよめる、

わすれては夢かとぞおもふ。思ひきや、雪踏みわけて君を見んとは、

とよみてなん、なく〳〵來にける。

源氏物語は、紫式部の著作にして、文學上、古今無比の至寶として賞稱せらる。全篇五十四帖あり。容貌、才德、位地、ともに全き、源氏の君を主人公とし、それに配するに、數多の佳人、才子等を以てし、その間の、複雜なる事實を描出して、よく、當時の人情、風俗を影寫せしめたり。その文、優雅艶麗にして、その思想の纒綿委曲なる所、聊か間然すべき所なし。實に、空前絶後の妙編と稱すべし。

其の卷名

桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫、末摘花、紅葉賀、花宴、葵、賢木、花散里、須磨、明石、澪標、蓬生、關屋、繪合、松風、薄雲、朝貌、乙女、玉葛、初子、蝴蝶、螢、常夏、篝火、野分、御幸、ふちばかま、眞木柱、梅かえ、ふぢの裏葉、若菜、柏木、横笛、鈴蟲、夕霧、御法、幻、雲隱（卷名のみ）

匂ふ兵部卿、紅梅、竹川（以下十帖）、橋姫、椎本、總角、早蕨、宿木、東屋、浮舟、かげろふ、手習、夢の浮橋

紫式部は藤原爲時の女なり。初め、右衞門權佐宣孝に嫁して一女を生みたり。これを、大貳三位と稱す。かくて、宣孝、世を早くせしにより、式部は、暫く寡居したりき。源氏物語は、全く、この間の著作なりと稱せらる。のち、一條天皇の中宮（上東門院）に奉仕せしに、御覽え、殊にめでたかりき。式部、幼時より頴語の聞えあり、長ずるに及びては、和漢の書史を涉獵し、朝家の典故に通曉し、また佛學にも深く、詠歌をもよくしたり。その性行、温厚謹謙にして、當時、殊に、貞淑の聞え高かりき。その著、この物語の外に、日記、家集等今に傳へらる。

さて、この物語の前に、住吉物語、大和物語、空穗物語など多かりけれど、その、何れの點より見るも、完備せるものは源氏物語なり。この後、又、二三の物語ありといへども、殆ど、これに比すべきものなし。左に源氏物語の文、二節を掲げん。

桐壺の卷の一節

月日へて、わか宮まゐりたまひぬ。いと、この世の物ならず、きよらにおよすけ給へれば、ゆゝしうおぼしたり。あくるとしのはる、坊さだまりたまふにも、いとひきこさまほしとおぼせど、御うしろみすべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなれば、中々あやふく覺しはゞかりて、色にもいださせたまはずなりぬるを、さばかりおぼしたれど、かぎりこそありけれと、世の人もきこえ、女御も、御こゝろおちゐたまひぬ。かの御おば、北の方なぐさむかたなくおぼしなづみて、おはすらん所にだに、たづねゆかんと、ねがひ給ひしなるしにや、ついにうせ給ひぬれば、また、これをかなしび覺すことかぎりなし。みこ、むつにはなりたまふとしなれば、この度は、おぼし知りて

戀ひなき給ふ。年頃、なれむつびきこえたまへるを、みたてまつりおくかなしびをなん返す〳〵の給ひける。いまは、うちにのみさぶらひ給ふ。なゝつになり給へば、ふみはじめなどせさせたまひて、世にしらず、さとうかしこくおはすれば、あまりに、おそろしきまで御覽ず。今は、たれも〳〵えにくみたまはじ。はゝ君なくてだに、らうたうし給へとて、弘徽殿などにもわたらせ給ふ。御ともには、やがて、みすのうちにいれたてまつり給ふ。いみじきものゝふ、あたかたきなりとも、みてはうちゑまれぬべきさまのし給へれば、えさしはなちたまはず。女みこたち二ところ、此の御腹におはしませど、なずらひたまふべきだにぞなかりける。御かた〳〵もかくれ給はず、いまよりなまめかしう、はづかしげにおはすれば、いとをかしう、うちとけぬあそびぐさに、たれもたれも思ひ聞え給へり。わざとの御がくもんは、さるものにて、ことふるのねにも、雲井をひゞかし、すべていひつゞけば、こと〳〵しう、うたてぞなりぬべき、ひとの御さまなりける。

橘姫の卷の一節

中將の君、ひさしくまゐらぬかなと、思ひ出できこえ給ひけるまゝに、有明の月の、まだ夜ふかくさし出づるほどに出でたちて、いと忍びて、御ともに人などもなく、やつれておはしける。河のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。いりもてゆくまゝに、きりふたがりて、みちもみえぬしげきの中をわけたまふに、いとあらましき風のきほひに、ほろ〳〵とおちみだるゝ木の葉の露のちりかゝるも、いとひやゝかに、ひとやりならず、いたくぬれ給ひぬ。かゝるありきなども、をさ〳〵ならひ給はぬこゝちに、こゝろぼそくをかしくおぼされけり。

やまおろしにたへぬ木の葉の露よりも、あやなくもろきわか涙かな。

山がつのおどろくもうるさしとして、ずゐじんのおともせさせ給はず。みばのまがきをわけつゝ、そこはかとなき水のながれ共を、ふみしだく駒のあしおとも、なほしのびてと、よういし給へるに、かくれなき御にほひぞ、風にさたがひて、ぬしさらぬかと、おどろくねざめの家々ぞありける。

日記

こは、日々の見聞を記せるものなり。これに、日常の記と、紀行との別あれど、その文の、簡潔にして修飾なき所、共に体を異にせず。この種の文、紀行は、紀の貫之の土佐日記に始まれり。その他、日常の記は、紫式部日記以下頗多し。

土佐日記は、醍醐天皇の延長八年、紀貫之、土佐の國守となりて赴任し、朱雀天皇の承平四年、任滿ちて上京したりし折の、海路の日記なり。當時、男子は、みな漢文を綴りて、假名文は、全く、女子の間にのみ行はれたりしを、貫之は、おもふ旨やありけん、故らに、假名文もて記したり。その文の輕快にして、毫も澁滯せざる所、後世の紀行文の模範たり。日常の記には、紫式部日記、蜻蛉日記、和泉式部日記などあり。その文躰、物語文に比すれば、較、實着にして、斧鑿の點少く、文章また簡潔なり。今土佐日記、紫式部日記中より、各、一節を擧げん。

土佐日記の一節

七日になりぬ。おなじみなとにあり。今日は、白馬を思へどかひなし。たゞ波のしろきぞ見ゆる。かゝるあひだに、人の家の、いけと名ある所より、鯉はなくて、鮒よりはじめて、川のも海のも、こともものも、長びつに、になひつゞけておこせたり。若菜籠にいれて、雉など花につけたり。わかなぞ、今日をしらせたる。哥あり。そのうた、

あさぢふの野べにしあれば、水もなき池につみつる若菜なりけり。

いとをかしかし。このいけといふは、所の名なり。よき人の男につきて、くだりて住みけるなり。この長櫃の物は、皆人、わらはまでにくれたれば、あきみちて、舟子どもは腹つづみをうちて、海をさへおどろかして、波たてつべし。

（下略）

十一日、あかつきに舟を出して、室津をおふ。人みな、まだねたれば、海のあり

さまも見えず。たゞ月を見てぞ、西東をばしりける。かゝるあひだに、皆、夜あけて、手あらひ、れいのことどもして、ひるになりぬ。今しばねといふ所にきぬ。わかきわらは、この所の名をきゝて、はねといふ所は、鳥のはねのやうにやあるといふ。まだをさなきわらはのことなれば、人々わらふに、有ける女わらはなん、この哥をよめる。

まことにて名にきく所はねならば、飛ぶがごとくに都へもがな。

とぞいへる。男も女も、いかで、とく都へもがなと思ふ心あれば、この哥、よしとにはあらねど、げにと思ひて、人々わすれず。このはねといふ所どふわらはのついでにぞ、またむかしの人をおもひいでゝ、いづれの時にかわするゝ、げふは、まして母のかなしむ事は、くだりし時の、人のかずたらねば、ふるき歌に、かずはたらでぞかへるべらなるといふ事を、おもひいでゝ、人のよめる。

世の中に思ひあれども、子をこふるおもひにまさる思ひなきかな。

といひつゝなん。

紫式部日記の一節

しはすの廿九日に、始めて參りしも、こよひのことぞかしゝ。いみじくも、夢路にまどはれしかなと、思ひ出づれば、こよなくたちなれにけるもうとましの身のほどやとおぼゆ。夜いたうふけにけり。御物忌におはしましければ、おまへにもまゐらず。心ぼそくてうちふしたるに、前なる人々のうちわたりは、猶いとけはひことなりけり。さとにては、今はねなましものを、さもいさときくつの音げさかなと、色めかしくいひゐたるを聞きて、

年くれて、わが世ふけゆく風の音に、心のうちのすさまじきかな。

とぞひとりごたれし。つごもりの夜、追儺いとくはてぬれば、齒ぐろめつけなど、はかなきつくろひどもすとて、うちとけゐたるに、辨の內侍きて、ものがたりして伏し給へり。たくみのくら人は、なげしの下にゐて、あてきがぬふものゝかさねひねり敎へなど、つく〳〵としゐたるに、おまへの方に、いみじくのゝしる。ないしおこせどとみにもおきず。人〻の泣き騷ぐ音のきこゆるに、いとゆゝしく物も覺えず。火かとおもへどさにはあらず。たくみの君、いざ〳〵とさきにおしたてゝ、ともかくも宮しもにおはします。まづ

參りて見奉らんと、內侍を、あら、かにつきおどろかして、三人ふるふ〳〵、足もそらにて參りたれば、はだかなる人ぞふたりゐたる。靱負、小兵部なりけり。かくなりけると見るに、いよ〳〵むくつけし。みづし所の人も皆いで、宮のさぶらひも、瀧口も、なやらひはてけるまゝに、みなまかでゝけり。手をたゝきのゝしれど、いらへする人もなし。おものやどりの刀自を、呼び出でたるに、殿上に兵部丞と云ふ癈人、よべよべと、はぢもわすれて、くちづからいひたれば、尋ねければ、どまかでにけり。つらきこと限りなし。式部丞すけなりぞまゐりて、どころ〴〵のさし油ども、たゞひとりさしいれてありく。人々もの覺えず、むかひゐたるもあり。うへより御つかひなどあり。いみじうおそろしうこそ侍りしか。をさめ殿にある御ぞどもいでさせて、この人々に給ふ。ついたちのさうぞくは取らざりければ、さりげもなくてあれど、はだかすがたは忘られず。おそろしきものから、をかしうともいはず、ことといみも去あへず。

隨筆

隨筆とは、耳目に觸れ、心に感じたる事どもを、折にふれて記したるものをいふ。この種の文は、當期には、未だ少くして、たゞ清少納言の、枕草子あるのみなり。清少納言は、歌人清原元輔の女なり。若きとき、一條天皇の皇后定子に奉仕し、才學を以て表はれたり。紫式部と共に、當時代の二才女と稱せらる。その性、快活にして豪放なりしかば、貞淑の德に、缺くる所もありしが如し。かくて、この草子は、その宮仕せる頃、見聞の事實を記し、かつ評論をも加へたるものなり。その文章、遒健にして筆鋒銳利なる所、實にこの種の文の、上乘といふべし。

枕草子うつくしきもの、段の一節

うりに書きたるちごの顏、雀の子の、ねずなきするにをどりくる。またべになどつけて居ゑたれば、親雀の、蟲など持て來てくゝむる、いとらうたし。三

つばかりなる兒の、急ぎて這ひくる道に、いとちひさき塵などのありけるを、目敏に見つけて、いとをかしげなる小指にとらへて、おとななどに見せたる、いとうつくし。あまにそぎたる兒の、目に髪のおほひたるを掻きは、道らで、うち傾きて物など見る、いとうつくし。たすきがけにゆひたる腰のかみの、白うをかしげなるも見るにうつくし。おほきにはあらぬ殿上わらはの、さうぞきたてられてありくもうつくし。をかしげなる兒の、あからさまに、抱きてうつくしむ程に、かいつきて寢入りたるもらうたし。雛の調度、蓮のうき葉のいとちひさきを、池よりあげて見る、葵のちひさきもいとうつくし。何も何もちひさき物は、いとうつくしいみじう肥えたる兒の二つばかりなるが、白ううつくしきが、二藍のうすものなど、衣ながくてたすきあげたるが、這ひ出でくるもいとうつくし。八つ九つ十ばかりなるをのこの、聲幼げにて文よみたる、いとうつくし。鷄の雛の足だかに、白うをかしげに、衣みじかなるさまして、ひよ〳〵と、かしがましく鳴きて、人の後に立ちてありくも、又親のもとにつれだちありく、見るもうつくし。かりの子、舍利の壺、瓔麥の花。

同きら〴〵しき物の段の一節

雪いと高く降りたるを、例ならず御格子まゐらせて、炭櫃に火起して、物語などして集まりさぶらふに、少納言よ、香爐峰の雪はいかならんと、仰せられければ、御格子あげさせて、御簾高く卷き上げたれば、笑はせたまふ。人々も、皆さる事は知り、歌などにさへうたへど、思ひこそよらざりつれ、なほこの宮の人には、さるべきなめりといふ。

史傳

こは、歴史上の事實を根據として、敷衍潤色したるものなり。されば、想像假說の點もあれど、また歴史として、極めて價値あるものなり。

榮花物語は、村上天皇より、堀河天皇の御代まで、百四十餘年間の事實を記したり。中にも御堂關白道長の榮華の狀を叙述せる所、委しきを以て、この書の名起れり。作者を赤染衞門

といひ傳ふれど、詳かならず。その文章の婉麗なる所、また當時代の名文といふべし。

大鏡は、一名を世繼と稱し、文德天皇の嘉祥三年より、後一條天皇の萬壽三年に至る、百七十六年間の事跡を記したり。これ我が國に於て、記傳躰の歷史の表はれたる最初なり。その躰裁は、大宅世繼、夏山繁樹といふ二人の老翁、雲林院の菩提講に詣でゝ、昔を語りたるを、傍に筆記したるやうに、書きなしたるなり。作者は、藤原爲業なるべしといへど詳かならず。その文章は、榮華物語に比すれば、簡潔にして、やゝ遒健なる所あり。

今昔物語は、榮華物語、大鏡などゝ、その躰裁を異にして、種々の談話を、列記したるものにて、往々、荒誕の事實も雜れり。作者を、宇治大納言源隆國なりといふ。隆國は、和漢の學に長じ、後三條白河の二帝に歷仕せる人なり。その夏季に至るや、毎年、宇治の南泉坊に移り、路傍に茶店を設け、往來の人に茶をすゝめ、一話をなさしめ、自ら障子の內に居て、之を筆記せしが、卽ちこの物語なりとぞ。その文章は、當時の通俗によれるものにて、漢字を交へ用ふること、漸く多くなれり。これ卽ち、和漢混和文の濫觴とも稱すべきか。

榮華物語浦々の別れの一節

殿、今は遁れ難き事にこそはあめれ。いかで此の宮の內を出て、木幡に參りて、近うも遠うも、遁はされん方にまかるわざをせんと、思しのたまはするに、この者どもたちこみたれば、おぼろげの鳥けだ物ならずば、出で給ふべきかたなし。宮中なりともなき御かげにも、今一度參りてこそは、今はの別

れにも御覽せられめと、いひ續けのたまはするまゝに、えもいはず大きに水精の珠ばかりの御涙、つゞきこぼるゝは、見奉る人いかゞ安からん。母北の方、宮の御前、御をぢの人々、例の涙にもあらぬ御涙いできて、此の怖ろしげなる者どもの、宮の内に入り亂れたれば、撿非遣使ども、いみじう制すれど、それにもさはるべき氣色ならず。かゝる程に、この狠りがはしき者の中をかきわけ、さすがにうるはしくさうぞきたるもの、南おもてに只參りに參る。こは何しにかと思ふ程に、宣命といふもの讀むなりけり。太上天皇をころし奉らんとしたる罪一つ、帝の御母后をのろはせたる罪一つ、おほやけより外の人、いまだ行はざる太元法を、私に隱して行はせ給へる罪により、内大臣を筑紫の帥になして流し遣はす。又中納言をば、出雲權守になして流し遣はすといふことを、よみのゝしるに、宮の内の上下、聲をとよみ泣きたる程の有さま、此の文よむ人もあわてたり。撿非遣使ども、涙をのごひつゝ、哀に悲しうゆゝしう思ふ。そのわたりに近き人々、みな聞きてかどをばさしたれど、此の御聲にひかれて涙とゞめ難し。さて、今は出でさせ給へ、日暮れぬと責め詈り申せど、すべて、ともかくもいらへする人なし。内にも、かくいらへする人なきよしを奏せさすれば、などてさるべき事にもあらず。只能々せめよとのみ、宣旨頻りに下るに、かくて此の日も暮れぬれば、内大臣殿、故殿、今宵さそひてゐて出でさせ給へと、おぼし念せさせ給ふしるしにや、そこらの人、さばかり、いひ詈りつれど、夜中ばかりにいみじう寢入りたれば、御をぢの明順ばかりと、御ともに人二三人ばかりして、ぬすまれ出させ給ふ。御心のうちに、多くの大願をたてさせ給ふしるしにや、事なく出させ給ひぬ。

大鏡道長の條の一節

いとをかしう、あはれに侍りし事は、この天暦の御時に、清涼殿の御前の、梅の木の枯れたりしかば、もとめさせ給ひしに、なにがしのぬしの、藏人にていますかりしときうけ給はりて、わかきものどもはえ見しらじ、きむぢもとめよと、の給ひしかば、ひと京まかりありきしかども侍らざりしに、西の京のそこ〳〵なる家に、色こくさきたる、木のやうだいうつくしきが侍りしを、ほりとりしかば、家あるじの、木にこれゆひつけてもてまゐれと、いは

せ給ひしかば、あるやうこそはとて、もてまゐりて候ひしを、なにぞとて御らんじければ、女の手にてかきて侍りける。

勅なればいともかしこし、然のやどはとどはゞいかゞこたへむ。

とありけるに、あやしくおぼしめされて、なにものゝ家ぞと、たづねさせ給ひければ、貫之のぬしのみむすめのすむ所なりけり。遺恨のわざをもしたりけるかなとて、あまえおはしましける繁樹今生のぞくかうは是や侍りけむかし。さるは、思ふやうなる木もてまゐりたりとて、きぬかづけられたりしも、からくなりにきとて、こまやかにわらふ。

今昔物語百濟川成飛驒工挑語

今昔、百濟の川成といふ繪師有けり。世にならびなき者にぞありける。某殿の石も、此の川成が立てたるなりけり。同じき御堂の壁の繪もこの川成が書きたるなり。（中略）然るにその比、飛驒の工といふたくみ有りけり。都うつしの時の工なり。世にならびなき者なり。武樂院はその工の起てたれば、めでたきなるべし。しかるあひだ、この工、彼の川成となむ、おの〳〵、そのわざをいどみける。飛驒の工、川成にいはく、我が家に、一間四面の堂をなむたてたる。おはして見給へ。赤壁に繪などかきて、得させ給へとなむ思ふと、互にいどみながら、中よくてなむたはふれければ、かくいふ事なりとて、川成、飛驒の工が家に行きて見れば、げにを、かしげなる小さき堂あり。四面に、戸皆開きたり。飛驒の工、かの堂に入りて、その内見給へといへば、川成、縁に上りて、南の戸より入らむとするに、その戸はたと閉づ。おどろきてめぐりて、西の戸より入らんとすれば、又其の戸はたと閉ぢて、南の戸はあきぬ。然れば、北の戸より入らんとすれば、またその戸はたと閉ぢて、西の戸は開きぬ。また東の戸より入らんとすれば、その戸は閉ぢて北の戸は開きぬ。かくまはり〳〵て、あまたゝび入らんとするに、閉ぢつ開きつ、入る事を得ず。わびて縁より下りぬ。その時に、飛驒の工、わらふ事かぎりなし。川成、ねたしと思ひてかへりぬ。その後日ごろ經て、川成、飛驒の工がもとにいひやるやう、我が家におはせ、見せたてまつるべき物なむ有ると。飛驒の工定めて、我をたばからむずるなめりと、思ひてゆかぬを、たび〳〵ねんごろに呼べば、工、川成が家に行きて、かくきたれるよしをいひいれたるに、こなたに入り給へと

いはしむ。いふにしたがひて、廊のある遺戸を引きあけたれば、内に大きなる人の、黒み眼くさりたる臥せり。くさき事、鼻に入るやうなり。思ひかけずに、かゝるものを見たれば、こゝをはなちて、おめきてさり返りぬ。川成内にゐてこのこゝを聞て、わらふ事かぎりなし。飛騨の工、おそろしとおもひて土にたてるに、川成、その遺戸より顔をさし出で、やおのれかくありけるは。たゞ來れといひければ、おづ〳〵よりて見れば、障紙のあるに、早う、その死人の形をかきたるなりけり。堂にはかられたるが、ねたきによりて、かくしたるなりけり。二人の者のわざ、かくなむ有りける、その比の物がたりには、萬のところにこれをかたりてなむ、みな人ほめけるとなむ、語り傳へたるなり。

序文　序文には、歌集の序と歌の序とありて、共に一種の體をなせり。歌集の序の尤古きは、古今集の序にして、以後、歷代の勅撰歌集の序は、大方、範を之に取りたり。歌の序には、大井川行幸和歌の序を以て始めとす。さて、これ等序文は、何れも、盛に修飾を加へ、對句を用ひて、壯重に叙述したり。ことに大井川行幸和歌の序は、艶麗の句層々相重なれる所、全く、漢文の四六併驪體に準ずる所あるなり。これ何れも、紀貫之の作なり。而るに、彼の土佐日記の文に比すれば、殆ど同人の筆には非るが如し。これ、當時の序文と、他の文との差異の點多きを知るべし。

大井川行幸和歌序

あはれ、我が君の御代、なが月の九日と、きのふいひて、殘れる菊を惜み給ひ、又くれぬべき秋を惜み給はんとて、月の桂のこなた、春の梅津より、御船よそひて、渡守をめして、夕月夜をぐらの山のほとり、行く水の大井の川邊に行幸し給へれば、久方の空には、たなびける雲もなく、みゆきをまち、流るゝ

水底には、濁れる塵なくて、御心にぞ協へると詔して、仰せ給ふことは、秋の水に浮びては、流るゝ木の葉と過たれ、秋の山を見れば、織る人なき錦とおもほえ、紅葉のはの風に散りて、曇らぬ雨と聞こえ、菊の花の岸にのこれる、空なる星とおどろき、霜の鶴河邊に立ちて、雲のおるゝかと疑はれ、ゆふべの猿山のかひになきて、人の涙をおとし、旅の雁雲路にまどひて玉章と見え、遊ぶかもめ水に栖みて、人になれり。「入江の松幾世經ぬらん」と、いふ事をぞよませ給ふ。我が筆短き心の、このもかのもにまどひ、つたなき言の葉、吹く風の空にみだれつゝ、草のはの露と共に、うれしき涙落ち、岩浪と共に、悅ばしき心ぞ立ちかへる、もし此の言のは世の末まで殘り、今をむかしにくらべて、後の今日を聞かん人、海人の栲繩くりかへし、玄のぶの草のゑのばざらめや。

第三章　和歌

柿本人麿、山邊赤人などの歌聖出でゝより、奈良朝時代は、大方、歌の全盛を以て經過ゐたり。而して、その末期よりこの時代の初期、即ち醍醐天皇の頃まで、凡そ百年の間は、漢文詩賦のみ流行して、その盛に發達したりし歌は、一時大に衰運に屬したり。されど、物皆進歩せし當時に於て、獨り歌のみ衰へゆくべきにあらず。此の期に至り、醍醐天皇の御代に、古今和歌集二十卷を勅撰せられしは、自然の勢なり。而して、この集は、勅撰の初めにして、以後、歷代撰集の模型となれり。かく、歌の道は再び勃興したれど、前代の氣風は、漸く失せて、殊に長歌の如きは、殆ど跡を絕ち、短歌、獨り隆盛を極むるに至りぬ。今爰に、その前代と異なれる所以を概說せん。すべて、歌は、眞率なる感情を詠出するにあり。故に彼の簡樸なる上代にありては、虛構を用ふることなく、たゞ、その有りの儘を諷詠し

たりき。さるに、漢學の隆盛以來思想を表明すべき文字ありてより、漸々、虚構を用ふるに至れり。この風、前期の末にやゝ起りて、此の時代には、全くその詞藻をのみことゝしたり。この時代の歌は、前代に比すれば、豪壯の氣漸く衰へて、婉麗の風を帶びたり。これ、歌の一大變遷にして、その婉麗なる所、當期文學の特殊の點といふべし。今、勅撰集中の最初なる、古今集につきて說明すべし。

古今集は、醍醐天皇の延喜五年、紀貫之、紀友則、凡河內躬恒、壬生忠岑等、勅を奉じて、萬葉集以後の歌を撰集したるなり。四季、羈旅、物名、戀、雜、哀傷、短歌、長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所の歌などの部を分ち、短歌、凡そ千餘首を載せたり。さて、此の集以後の歌は、言姿を飾ること巧みにして、漸く自然に遠ざかれるものあり。特に、長歌の如きは、全く衰へて、此集にだに、僅かに、數首をのせたるに過ぎず。而して、その句法も亂れ、風姿卑しくして、萬葉集の長歌とは、固より比すべくもあらず。今、當期の勅撰集の名を左に擧げん。

後撰集　村上天皇の天曆五年、源順、大中臣能宣、坂上望城、紀時文、清原元輔（以上五人を梨壺の五人といふ）勅を奉じて撰す。

拾遺集　一條天皇の長德年中、大納言藤原公任の撰なりともいひ、また、花山院の御自撰なりともいふ。

以上、二集と古今集とを合せて、三代和歌集と稱す。

後拾遺集　白河天皇の應德三年、中納言藤原通俊撰す。

金葉集　崇德天皇の大治元年、源俊賴、白河院の院宣を奉じて撰す。

詞花集　近衛天皇の天養元年、藤原顯輔、崇德院の叡旨を奉じて撰す。

千載集　後鳥羽天皇の文治四年、藤原俊成、後白河院の院宣を奉じて撰す。

以上、四集に三代集、及び次期の新古今集を加へて、八代和歌集と稱す。

右に列擧したる勅撰集の外、私集には、堀河院百首前後の集を始めとし、當時の學者、歌人中、何れの人も、その家集のあらざるは少し。故に、當時の和歌の全躰を知らんには、素より、勅撰集のみに限られたるものにあらずして、却てその特色は、私撰家集などに、おほくあることを知るべし。

短歌

歌奉れと仰せられし時に、よみて奉れる。　紀貫之

さくら花　さきにけらしも　あしびきの　山のかひより　見ゆるしらくも

北山にもみぢをらむとて、まかりけるときによめる。　同

見る人も　なくて散りぬる　おくやまの　もみぢは夜の　にしきなりけり

大和國にまかれりける時に、雪のふりけるを見て。　坂上是則

あさぼらけ　有明のつきと　見るまでに　吉野のさとに　ふれる白ゆき

田村の御時、事にあたりて津の國すまといふにこもり侍りけるに宮のうちに侍りける人に遣はしける。　在原行平

わくらはに　とふ人あらば　須磨の浦に　藻鹽たれつゝ　わぶとこたへよ

旋頭歌

題しらず　讀人しらず

初瀬川　ふる川のべに　ふたもとある杉
　　年を經て　又もあひ見ん　ふた本ある杉

同　紀貫之

君がさす　三笠のやまの　もみぢ葉の色
　　神無月　しぐれの雨の　染むるなりけり

長歌

冬の長歌　凡河内躬恒

ちはやぶる　かみなづきとや　けさよりは　曇りもあへず
うちしぐれ　もみぢとともに　ふるさとの　よし野の山の
山あらしも　さむく日ごとに　なりゆけば　玉のをとけて
こきちらし　あられみだれて　玄もこほり　彌かたまれる
庭のおもに　むら〳〵見ゆる　ふゆくさの　上に降りしく
玄らゆきの　つもりつもりて　あらたまの　年のあまたも
すぐしつるかな。

（以上古今集）

左大臣の家にて、かれこれ題をさぐりて歌よみけるに
露といふ文字を得侍りて。　藤原忠國

われならぬ　草葉もものは　おもひけり
　　袖よりほかに　おけるしらつゆ

題玄らず　在原元方

いそのかみ　ふる野のくさも　秋はなほ
　　色ことにこそ　あらたまりけれ

延喜の御時、歌めしけるに奉りける。　紀貫之

春かすみ　たなびきにけり　ひさかたの
　　つきのかつらも　花やさくらむ

（以上後撰集）

屏風に　大中臣能宣

第三章　和歌

ちかくてぞ　色もまされる　あをやぎの
　糸はよりてぞ　見るべかりける

　藤原爲頼

廉義公の家にて、草むらの虫といふ題を。

おぼつかな　いづこなるらむ　虫の音を
　尋ねばくさの　つゆやみだれむ

　僧正遍昭

はじめてかしらおろしける時、物にかきつけゝる。

たちちねは　かゝれとてしも　うば玉の
　わが黒髪を　なでずやありけむ

（以上拾遺集）

第四章　舞曲朗詠

こゝに舞曲と稱するは、神樂歌、催馬樂歌の類をいふ。これ等は、すでに前期の末より起りて、此の時代に至り、その曲節も定まりたるなり。さて、我が國歌舞の原は、遠く神代にありて、天照大御神の天岩戸に籠り給ひし時、諸神の、これを奏したりしこと、古史に見ゆ。而して、神樂歌は、祭祀の時、神前に於て奏したるものにて、その曲は、三十一文字の歌を、一句、もしくは二句を繰り返へして、謠ひたるものなり。また、催馬樂歌は、もと民間の俗謠より起り、遂に上流社會にも行はるゝに至れるなり。されど、これを用ひたるは、神樂の儀式はてゝ後、または内宴の時等なり。

すでに陳べたる如く、此の時代の和歌は、全く、詞藻を嗜むべきものとなりしを以て、一方に謠ひ物としては、此等舞曲類の發達せしを知るべし。

神樂歌　採物（うなり）

賢木

さかき葉の　香をかぐはしみ　とめくれば　八十氏人ぞ
まとゐせりける　やそ氏人ぞ　まとゐせりける（本）
神垣の　三室の山の　さかき葉は　神のみ前に
茂りあひにけり　しげりあひにけり（末）

催馬樂歌　律

我駒

いでわが駒　はやくゆきこせ　まつち山　あはれ　まつち山　はれ
まつち山　待つらん人を　ゆきてはや　あはれ　ゆきてはやみむ

神樂歌、催馬樂歌の外に、當時代に、なほ行はれし謠物には、今樣朗詠などありき。今樣は、彼の有名なる伊呂波歌より始まれり。その姿は、おほく、七五の句四つを駢べたるものなり。而して、その尤も盛に行はれたるは、次期にあり。

朗詠は、漢文、漢詩中の佳句をば、諷誦せしに始まれるものにて、後には、和歌をも交へうたふに至れり。こは、はやくより行はれたるが如きも、愈、隆盛の域に達したるは、又、この次期に於てせり。然して、當時、和漢朗詠集といふ者あり。彼の後拾遺集の撰者の一人と稱する、藤原公任の著にして、詩文の佳句を類別し、かつ和歌をも加へて編輯せしものなり。

以上、神樂歌より、以下、朗詠までの謠物をば、當時總稱して、郢曲と呼びたり。

山家　白樂天

遣愛寺鐘敲枕聽、香爐峯雪撥簾看。
蘭省花時錦帳下、廬山雨夜草庵中。　同

山路日暮滿耳者樵歌牧笛之聲。　紀齊名

溯戸烏歸遮眼者竹煙松霧之色。　讀人不知

山里は　もの、さびしき　ことこそあれ
よのうきよりは　すみよかりけり　源宗干

山里は　冬ぞさびしさ　まさりける
ひとめも草も　かれぬとおもへば

（和漢朗詠集）

第四編　鎌倉時代の文學

第一章　總說

後鳥羽天皇……後醍醐天皇
紀元一八四〇……一九九三

王綱已に弛び、武士、勢を得るに至り。天下の政權、殆ど、その掌中に歸し、戰亂屢起り、九重の帝都も、亂離の巷とかはり、天子、西海に漂ひ給ふ程の悲運となりしかば、文學の如きも、また一時、中絶の姿を呈せり。承久の役に、院宣を、關東に下し賜ひしに、北條泰時は、藤田三郎といふものを、五千人中より求めて、之を讀ましめたりといふ。以て、當時武人の無學なりしを知るに足る。而して、當時の文學は、僅かに、王朝以來の博士の家々、もしくは、僧侶間に行はれたるに過ぎざりき。かく世と

共に文學は、衰運に向ひたれど、なほ一方には、見るべきものの尠しとせず。而して、その作者も、前期とは、甚だ趣きを異にして、おほくは、僧侶、隱士等にてありき。されば、從つて、その思想も、悲哀沈痛なるもの多くして、概して、當時の文學は厭世的の氣を帶びたり。これ素より、時世の變動によれる現象に外ならず。幕府樹立してより、幾くもなくして、源氏は三代にて亡び、承久の變には、三帝播遷の悲運を見給ふに至る、世人の、無常を感ぜしも、決して遇然にあらざるなり。

人心の變遷、此くの如し。而して、當時、また佛敎の影響もおほかりき。抑、當期の佛敎は、彼の眞言、天台等の如き、儀式嚴正なるには似ずして、一向宗、淨土宗、法華宗の如く、皆念佛誦唱を以て、足れりとして、極めて、簡單なるものなりき。禪宗の如きも、たゞ、坐禪の功を積み、心の淸淨を、旨とせるものなれば、當時の武士の氣風に適合して、遂には彼の、王朝以來の他宗をも、壓倒する勢あり。されば、その勢の影響する所、たゞに文學上のみにあらず、一般の風俗、乃至、衣食住にまで波及し、事々物々、皆禪味を帶び、幽邃淡洒の風を呈して、王朝以來の習俗をも、一變せしむるに至れり。

當期の文學は、まづ散文には、戰記を始めとし、日記、紀行、隨筆、雜史等あり。和歌には、なほ、八代集の一なる新古今集以下、代々の勅撰、その他、歌人の家集おほし。ここに、戰記文の如きは、當期文學の特色として、見るべきものなり。今順次その所以を述べん。

第二章　散文

この時代の散文は、すでに、總論に述べたる如く、戰記には、保元物語を始め、平家物語、源平盛衰記等あり。日記には、十六夜日記等あり。隨筆には、方丈記、紀行には東關紀行等あり。その他、水鏡、今鏡、古今著聞集の如き雜史などあり。而して、この時代の散文は、比較的、和漢混和文おほくして、純粹の和文體の物は、僅かに十六夜日記等あるのみ。抑、前期の末年には、漢文すでに衰へて、一種異樣なる記錄體の文行はれて、朝廷の日誌、公卿の記錄は、皆これを用ひたりしが、當期に至りては、幕府の公文、記錄等、全くこの種の文を用ふるに至れり。これ、この時代の特色にして、その影響を、後世の文學に及ぼせるもの多しといふべし。

戰記　是より先、假作物語等、おほく行はれたれども、すでに、當時の人心に適せざれば、これにかはりて、戰記文は現はれたり。而して、此は、全くの假作物語にはあらずして、當時の戰爭の狀態などを描寫して、巧みに、敷衍潤色を加へたり。その文、和漢の故事、佛語をまじへて、筆力の雄健自在なること、實に、當期の文學界に、一生面を開きたるものなり。

保元物語、平治物語は、共に、葉室大納言時長の作と稱せらる。この物語は、名の如く、保元、平治の亂の顚末を叙せるものなり。その文簡潔にして、能く、當時の情致を寫して餘蘊なし。保元の爲朝、平治の義平につきては、尤も力を極めて、記したる痕跡あるを認む。蓋し、この二人を以て、各、その骨子とせるものゝ如し。又、この物語は、戰記文の嚆矢にして、後の模範たる

こと勿論なり。

（戦記文の例證は、現時、何れの中學國文讀本にもをさめられたれば、茲には省くこととせり。以下、隨筆等もこれに倣ふ。）

これにつぎて、平家物語、源平盛衰記など出でたり。また名の如く、共に、源平二氏の盛衰を記したるものなり。平家物語は、信濃の前司行長の著ありといひ、盛衰記は、保元物語と同じ」く、葉室大納言時長の作なりと、いひ傳ふれども信じがたし。平家物語は、もと琵琶に合せて、盲人の謠ひたるものなれば、その文の流暢なる所、やゝ、他と異なれり。而して盛衰記は、これを基として、一層潤色を加へたるものにて、その本領たる、矢石雨注の狀を寫せる所は、殆と眞に迫れり。

隨筆　當期の隨筆文には、たゞ鴨長明の方丈記あるのみ。長明は菊太夫と稱し、鴨の社人にして和歌に長じ、後鳥羽天皇の御代、和歌所の寄人となりたり。後感ずる所ありて職を辭し、髮を削り、大原山に隱れ、方丈の庵を結び、風月を友として、命を終れりといふ。方丈記は、實にこの時になりたるものなり。されば、その文、全く厭世の氣、怨恨の念を以てみたされたり。文體は、また和漢混和の體なれども、その平易なること、戰記文と異なる點多し。

日記紀行　當期の日記文には、辨内侍日記、中務内侍日記等あれど、前代の日記文と、さしたる差異なきは、擬古體の文章なればなり。特に、阿佛尼の、十六夜日記は、その重なるものにして、文章優雅なる間に、往々、悲愴の語氣あり。こは、阿佛尼、訴ふる所ありて、鎌倉下向のをり、旅中の所感を記したるも

のなればなり。その他、紀行には、源光行の海道記、源親行の東關紀行等あり。これ等は、共に和漢混和文體にして、その文章また見るべし。

東關紀行の一節

鏡の宿にいたりぬれば、昔な、の翁のよりあひつ、、老をいとひて詠みける歌の中に「鏡山、いざたちよりて見てゆかん、年へぬる身は老やしぬると」といへるは、此の山のことにやとおぼえて、宿もからまほしく覺えけれども、猶、おくざまにとふべき所ありて、うち過ぎぬ。

たちよらでけふはすぎなむ、鏡やま、知らぬおきなのかげはみずとも。

ゆきくれぬれば、むさでらといふ山寺のあたりに泊りぬ。まばらなるとこの秋風、夜ふくるまゝに身にしみて、都には、いつしか引きかへたるこゝちす。枕に近き鐘の聲、曉の空におとづれて、かの遣愛寺の邊の草の庵の寐覺も、かくや有りけむと哀なり。行末とほき旅の空、思ひつゞけられて、いといたう物がなし。

都いで、いくかもあらぬ今夜だに、かたしきわびぬ、とこのあきかせ。

この宿を出で、笠原の野原うちとほる程に、おゞその杜と言ふ杉むらあり。下草ふかき朝つゆの、霜にかはらん行すゑも、はかなくうつる月日なれば、遠からずおぼゆ。

變らじな、我がもとゆひにおく霜も、名にしおいそのもりのしたくさ。

音にきゝし醒か井を見れば、陰くらき木の下の、岩根より流れ出づる清水、餘り涼しきまで澄みわたりて、實に身に染むばかりなり。餘熱、いまだつきざる程なれば、往還の旅人、多く立ち寄りて涼みあへり。班婕妤が團雪の扇、秋かぜに、かくて、暫忘れぬれば、末遠き道なれども、立ちさらんことはものうくて、更にいそがれず。かの西行が、道のべに清水流るゝ柳かげ、しばしとてこそたちとまりつれ」と詠めるも、かやうの所にや。

道のべの、こかげの、清水むすぶとて、しばしやすまぬたび人ぞなき。

雜史

當期の史傳文には、中山忠親の著と稱する水鏡、著者不明なる今鏡、續世繼及び、橘成季の作なりといふ古今著聞

集等あり。水鏡、今鏡は、大鏡に倣へる歴史物語にして、水鏡は、神武天皇より、仁明天皇の御代までの事歴を、畧述したるものなり。また今鏡は、大鏡につぎて後一條天皇より、高倉天皇の御代までの事歴を列記せり。古今著聞集は、種々の傳記、逸話等を記せるものにて、彼の今昔物語にやゝ類せり。かくて、以上の水鏡、今鏡等は、もと、彼の大鏡、榮華物語などにならひて、記せるものなれば、文體も、またそれと大差なし。而して、古今著聞集等は、和漢混和文體なれば、即ち當時の文體として、見るべきものとす。その他、これに類したる十訓抄、宇治拾遺物語、砂石集など皆然り。

和歌の部の一條

能因入道伊豫守、實綱に伴なひて彼の國に下りけるに、夏の日久しく照りて、民のなげき淺からざるに、神は、和歌にめでさせ給ふものなり、試によみて三島に奉るべきよしを、國司をきりに進めければ、

あまの川、苗代水にせきくだせ、天くだります神ならば神、

とよめるを、御幣にかきて、神宮して申しあげたりければ、炎干の天、俄かにくもりわたりて、大なる雨ふりて、枯れたる稻葉、おしなべて綠にかへりにけり、忽に、天災を和ぐること、唐の貞觀の帝の、蝗をのめりける政にも劣らざりけり。

能因は、いたれるすきものにてありければ、

都をば、霞とともに立ちしかど、あき風ぞふく白川のせき。

とよめるを、都にありながら、この歌を出ださんこと念なしと思ひて、人にも知られず、久しく籠り居て、色をくろく日にあたりなどして、後、陸奥國の方へ修行の次に、よみたりとぞ披露し侍りける。

（古今著聞集）

江帥の覩相唐の返牒に舉を見はす事

江帥は、まためでたき相人なりけり。清隆卿因幡守のとき、院の御使として來れり。帥、持佛堂に入りて、念誦の間ありければ、御使を緣にするゐて、あかり障子をへだてゝ、こゝに謁す。清隆、御使なり、奇怪の事かなとおもひながら、數刻問答して歸參の時、障子を細目にあけてよびかへして後、官は正二位中納言、命は六十六ぞといふ。果して詞の如し。又勅定により、法華八軸を、一夜中に暗誦しけり。たゞ人にはあらざるにや。

唐の后、あしき瘡出來給ひて、其國の醫師、力およばざりければ、日本、雅忠といふいみじきくすしありと、傳へ聞きたまひて、これを渡さるべきよし、唐の帝より、申しおくり給へりけるに、やりやらぬのこと、公卿の御定ありけり。人々の申すやう、こゝろ〳〵にて定りえず。帥、民部卿經信卿、とばかりまたれて、參りて事の次第聞きて、唐の后の死なん、日本に何かくるしと、たゞ一言いはれたりければ、此の意見につきて、わたさるまじきに定りにけり。其の返牒は、匡房うけたまはりてぞ書れける。

雙女難達鳳池之浪。扁鵲豈入鷄林之雲。

この句をば、和漢ともに、ほめあへりけるとぞ。（十訓抄）

消息文

前期、漢學の隆盛なりし以來、男子は漢文を以て往復文としたりしが、この時代に至りては、更に、一種混交の文體を用ふるに至れり。されど、前期、おほ内々には、假名文をも、あはせ用ひたりしが如し。また、女子の消息文は、素より、前代のまゝをうけたる假名文を以て、使用したりしこと勿論なり。今、左に、當期の消息文、兩樣をあげて、一般を知らしめん。

武士之上洛候事者、爲今追討朝敵候也、朝敵不候者、武士又不可令上洛、武士又不令上洛者、不可致狼藉候歟、而敵人隔海之間、于今不遂追討、經廻之武士、國々庄々無四度解事、其聞多候、仍追討以後、可令沙汰之由、雖存思給候、近國

者爲令糺定使者二人所令上洛候也其以前不覺者候只守院宣相副御使爲廻行計候不然者令進退候者定似自由之沙汰候歟募頼朝威武士濫妨事令停止候之許也子細勤狀給使者候畢以此旨可令申沙汰給候恐々謹言

三月四日　　頼朝

謹上藤中納言殿　　（吾妻鏡）

（上畧）まづたゞ人は心にて候なり。いかに、みめかたちうつくしく、能よにならびなく、きこえ候へども、心さだまらず、うつゝとしも候はねばいたづらごとにて候ぞ。御心に心をそへて、いかにあらまほしく、おぼしめし候御事にて候とも、おのづから世にもれきこえて人のもどきそしりぬべからんことをば、ふるまはせおはしましまじく候ぞ。（中畧）うきこともいみじきことも、たゞ、うたゝねの夢にて候へば、それをおぼしめし知りて、何事もはかなき世には、御心をくるしめ候はで、佛の道をいとなませおはしまし候べく候。おもひ出のまゝ、ふと、よろづの事申つゞけ候ぬる、をこがましき事どもおほく候はん。御覽せさせおはしまして、やがて、火に入させおはしまし候べく候。あなかしこ。

きの內侍どのへ　　雲ゐはるかにへだつかたより（阿佛尼）

（乳母の文）

第三章　和歌

古今集ありてより、歷世、勅撰の擧絕ゆることなく、當期に至るまで、すでに七代の集あり。この期に至りては、後鳥羽天皇、ことに和歌を好みたまひ、和歌所を興し、寄人を任じて、專ら、歌道の隆盛を計りたまへり。當時、天皇を始め、御子、土御門、順德の二帝も、詠歌に長じ給ひしかば、從つて群臣の、この道に傑出せるものおほくして、その隆盛なること、一時は、前代を凌駕するに至れり。而して、この盛時に現れたるを、まづ新古今集とす。

新古今集は、土御門天皇の元久二年、藤原定家、同家隆、有家、雅經、通具の五人、勅を奉じて撰び、攝政藤原良經之を統總し、後鳥羽上皇、親しくこれを裁定したまへり。その歌體は、句調、流麗にして緣語多く、動もすれば、過巧の點なきにあらず。されど、前期以來の和歌は、全くこの集に至りて、發達の極點に達したるもといふべし。この後、勅撰の集少からずといへども、殆どこれに比すべきものなし。これより先、前期の中頃に於て、歌學の風起りたりしが、この時代に至りては、その風、愈盛になり、二條家、冷泉家の如きは、歌學の師範と稱し、煩雜なる法式を立てゝ、互に流派を爭ひ、遂に歌を以て、その狹隘なる範圍中のものとするに至れり。かくて後は、歌道漸く衰へて、又、昔日の觀なし。今、新古今集以後、當期に於ける勅撰集を、あぐれば左の如し。

新勅撰集　後堀河天皇の貞永元年、藤原定家、勅を奉じて撰す。

續後撰集　後深草天皇の建長三年、藤原爲家、後嵯峨上皇の院宣を奉じて撰す。

續古今集　龜山天皇の文永二年、藤原基通、藤原爲家、藤原光俊、後嵯峨上皇の勅を奉じて撰す。

續拾遺集　同天皇の文永十年、藤原爲氏、勅を奉じて撰す。

新後撰集　後伏見天皇の正安三年、藤原爲世、後宇多上皇の院宣を奉じて撰す。

玉葉集　花園天皇の正和二年、藤原爲兼、伏見上皇の勅を奉じて撰す。

續千載集　同天皇の文保三年、藤原爲世、後宇多上皇の勅を奉じて撰す。

續後拾遺集　後醍醐天皇の元亨三年、藤原爲藤、勅を奉じて撰す。

かく新古今集以後、八代の勅撰集あれども、その歌人等、おほくは、見識偏狹にして、一人も、前代の歌人に超絶したるものなし。然るを、當期の初め、鎌倉右大臣實朝の如きは、よく雄大なる思想を詠出して、後世より、萬葉以後一人と稱せられたり。その歌集に金槐集あり。この他、僧西行の山家集の如き、家集も少からず。從つて、また、その特色の見るべきものあり。又、當期にありては、和歌の外に、今樣、連歌など、頗る行はれたり。今樣につきては、すでに、前期に於て、述ぶる所ありき。而して、神樂歌、催馬樂歌等の舞曲は、當時、やゝ衰へて、一方には、又、謠ひ物として、今樣、朗詠の混和したる宴曲と稱するもの、行はれたり。

短歌

攝政太政大臣家百首歌合に、春曙といふ心を、よみ侍りける　藤原家隆

かすみたつ　するのまつ山　ほのぼのと
なみにはなる、　横ぐものそら

千五百番のうたあはせに、春歌、　藤原有家

あを柳の　いとにたまぬく　しらつゆの
知らずいく世の　春かへぬらん

題しらず　西行法師

津のくにの　なにはのはるは　夢なれや
あしのかれ葉に　風わたるなり

百首歌奉りしとき　百四　藤原定家

駒とめて　そでうちはらふ　かげもなし
　さの、わたりの　ゆきの夕暮

五十首歌奉りしとき　前大僧正慈圓

よの中の　はれ行くそらに　ふるしもの
　うき身ばかりぞ　置き所なき

（以上新古今集）

ひとり思ひをのべ侍りける歌　鎌倉右大臣

山はさけ　海はあせなん　世なりとも
　きみにふた心　われあらめやも

百首歌よみ侍りける　後京極攝政前太政大臣

ひさかたの　雲井に見えし　いこま山
　春はかすみの　ふもとなりけり

（以上新勅撰集）

今様歌

君をはじめて　見る時は　千代も經ぬべし　讀人しらず
おまへの池なる　龜岡に　鶴こそ群れゐて　遊ぶなれ

同

佛の方便　なりければ　神祇の威光　たのもしや
たゝけば　必ず響あり　仰げば定めて　花ぞ咲く

（源平盛衰記）

讀人しらず

をさまり靡く　時なれや　一天四海の　うちのみか
人の國まで　日のもとの　もろこしが原も　此の所

（吾妻鏡）

第五編　室町時代の文學

第一章　總說

後醍醐天皇……後陽成天皇
紀元一九九四……二二六三

この期の初め、五十餘年間は、所謂、南北朝の大亂にして、天下殆ど寧日なかりき。室町幕府の建設後と雖も、なほ、內亂たゆる時なく、應仁の亂ありてよりは、群雄各地に割據して、騷亂甚しかりき。されば、文學の衰頽は勿論、その他百般の事物、皆舊觀を留めざるに至りぬ。

天下の形勢、かくの如しといへども、なほ、一道の光明は、一方に映射せるありき。これ、我が文學史中、特に注意すべき所たり。而して、當期の文學につきては、僧侶輩の功績、尠しとせず。

そは、僧侶は、世の變遷に與らずして、一方に籠居して、文事に勤めたれば、將に廢絶せんとする文學は、その手によりて、繼續せられたるを以てなり。漢學の如きは、殊に然りとす。されば僧侶中には、知名の輩少からずして、彼の後醍醐天皇の侍講たりし玄慧といひ、足利尊氏の師たる疎石といひ、何れも、當代屈指の名僧なりき。その他、歸化僧等、頗るおほくして、多少、前代と異なる學風をも、輸入せり。而して、僧玄慧の始めて、彼の朱註をとりて、經書を解せし如きは、他日江戸時代に於て、漢學の勃興すべき、一の動因をなせるものなり。

當時また、公卿堂上中にも、博學の人少からず。まづ南北朝の頃には、北畠親房あり。その他、二條良基、一條兼良の如きは、尤勝れたるものなり。されば、一般には、文學衰へたりといへども、なほ一部には、見るべきもの少からず。ここに、此の期、唯一の物たる謠曲の如きは、前後に比ひなき發達をなしたるものなり。

此の時代には、和歌も亦、愈、衰運に傾きたれど、なほ、前代につぎて勅撰の擧もあり。從つて、有名なる歌人少からず。されど當時和歌は、益、偏狹に陷りたるを以て、その反動として、連歌は、亦盛に行はれたり。

以上述べたる如く、文學は、かゝる戰亂の際にありても、比較的に發達をなして、次期文學の基礎を、なしたるものと知るべし。以下、次々にその所以を說明せん。

第二章　散文

この期の散文には、戰記、雜史及び種々の雜著、その他、日記、紀行やうのものもあり。これ等の中、一部を除きては、皆和漢混和文の、よく調和せるものにして、文學上、稱揚すべき價値おほきものとす。

隨筆及び雜著

當期の隨筆文には、徒然草、尤も有名なり。徒然草は、吉田兼好の漫錄なり。兼好は、卜部氏に生れて、詠歌をよくし、後宇多上皇に仕へ、後、出家して、洛西雙岡に閑居したる人なり。此の書は、卽ち、遁世中、をり〳〵に書き綴りたるものなれば、素より、一部完成のものにあらず。されば、一說には、兼好沒後、その庵中に求めて、後人の編成したるものなりとさへいひ傳ふ。

その文體は、彼の枕草子にならへるものなれども、佛語、漢語を混用し、その說く所、老、莊、儒、佛の間に出入し、氣韻高く、文章雄健にして、隨筆中、おほくその比を見ず。

又當期には、一條兼良の、將軍義尙のために、政治の得失を論じたる樵談知要、又は文明一統志、朝家の儀式行事を記せる公事根源、あるは、源氏物語の註釋なる花鳥餘情等あり、何れも、混和文を以て、平易に書き記されたり。二條良基の小夜の寢覺、今川貞世の道ゆきぶり、三條公條の吉野詣記等、紀行文も、また少からず。

父母の恩

高きも卑しきも、父母なきものなし、父母の恩の重きことをいふに、釋尊の內敎、孔子の外典にも、此の事を說き給へり、佛の敎には、左の方に父を荷ひ、

右の方に母を荷ひて、毎日に須彌山を廻るとも、此の恩は、なほ、報ひ難かるべしと說き給へり。孔子の敎には、身體髮膚は父母にうけたり、敢て、毀ひ傷らざるを、孝の始めといへり。譬へば、子たるもの、我が身は親の預けたる者なれば、いかにも身を愼みて、疵かたはもつかぬやうに振舞はんが、孝行の道なるべし。其の故は、子の身に病ひつゝがもあれば、親は愁ひ悲しむ者たるにより、能く身を愼めば、親の愁をなさゞるによりて、孝行とはなるものなり。次に父母の過ちある時は、子たる者の諫めざるも、又不孝の罪なるべし。其の過ちあらんときは、いかにも機嫌をとり、言葉をやはらげ、色を能くして、敎訓を致すべきなり。それにも拘らずば泣きくどき、そら腹立をしても、思ひ直るやうに敎訓すべきは、孝行にて侍るなり。そも〳〵、我が身が親に不孝なれば、其の報いに、わが設けたる子が、又我れに不孝なるべきによりて、其の時に思ひ知る事あるべきなり。凡夫の習ひ、內典外典にいふが如く、うつくしくは、ふるまはれぬ事なれど、その道理をば、たれも〳〵、能く心得べき事なるべし。（文明一統志）

道ゆきふりの一節

きさらぎ廿日の夜ふかく、かすみつゝ、山のはちかき月かげに、中なる川うちわたすほど、袖のしづく、いと所せき旅の衣の、あさだちそむるだに、かくしをれぬるに、まいて、行くすゑの、八重のしほぢのかいのしづく、思ひしられたり。其の日は山崎につきぬ。こゝは、常にめなれし所なれど、このたびの名殘にや、ことならぬ草木の色も、いと物がなし。つの國のあくた川にいたりぬるにも、ちりの身のゆくすゑ、いかゞと覺束なし。せ川小屋野などいふ所のげすごもの、ものみはべるとて、思ふことなく、いそがはしからぬけしきも、今はうらやましく覺ゆ。

かくばかり苦しからずば、蘆火たくこやのうちにも世をやつくさむ。

川づらにそひて、木ぶかくものふりたる山あり。鳥居たてり。そのあたりの人に尋ねはべれば、これは、むかし足姫（タラシヒメ）の、もろこしの三の國、したがへたまひ、かへりたまひける時、この山に、よろひかぶと埋み給ひけるより、やがて、武庫の山と申すとなん。

このたびも、あらき浪路もさはりなく、なほふきおくれむこのやま風。

古集にも、入江の洲鳥などよみ侍るとぞ。

むこの浦の入江のすごり、いかにして、たつ跡にしもとむるこゝろぞ。

うちでの濱うちすぐれば、在五の中將の、わがすむかたといひけん蘆屋の里になりぬ。それよりこなたに、磯ぎはちかき松かげに、玉垣神さびて、鳥居などたてる所あり。北野の宮の、此のところに影向したまいてよりのち、御影の松原と申すなるべし。

君がため、暗かるまじきこゝろには、かみも御影をうつさざらめや。

ほどなく、いくた川につきぬ。鳥ゐしますらをのつかとて、道のべちかく村だちたる、松風かすかにおとづれしも、なにとなく、聞きすぐしがたかりき。

さて、みなと川といふ所に、一夜とゞまりてあけしかば、京よりしたひきつるともだち、一人ふたり今はとわかれ行くほどに、いとゞ心ぼそくて、いきうしといひつべきほどなり。

旅ごろも朝たつそでのみなとがは、かはらぬせにと猶やたのまん。

雜史　この種の著作にはまづ、北畠親房の神皇正統記、また、前期の歴史物語の後を襲ひたる增鏡、また、源平盛衰記等の流をくみたる戰記文などなり。その他、梅松論、櫻雲記等、當時の戰爭の狀を叙したるもの、また少からず。

神皇正統記は、南朝の忠臣北畠親房の著なり。親房、深く、當時順逆の道を辨ふるものなく、大義名分の明かならざるを憂ひ、身、矢石の間にありて筆をとり、上神代より、下後村上天皇の御代に至るまでの事歴をあげて、南朝の正統たる所以を、記したるものなり。その議論正大、筆鋒謹嚴にして、文理明晰なる所、議論文の好模範たり。

太平記は、神皇正統記と、殆と同時の著作にして、その著者は、小島法師といふ者ならんといへども詳かならず。書中の事

實は、建武中興前後の、戰亂の狀を叙したるものなり。その漢語佛語を交へて記せる所、彼の源平盛衰記等に等しく、文章、極めて雄壯奇拔なり。この他、義經記、曾我物語、梅松論等あれど、おほくは、これに準據したるものなり。

增鏡は、後鳥羽天皇の御代より、後醍醐天皇の御代まで、凡百三十餘年間の歷史物語なり。著者、また詳かならず。體裁は、前期の今鏡の如くにして、文章は擬古體なり。而して、此の書と、彼の大鏡、水鏡と合せて三鏡と稱し、歷史中價値あるものとせり。この他、南朝の事歷を記せる吉野拾遺等あり、世に傳へらる。

又、この時代には、中古の假作物語の後を承けたる、短編小說あり。この類を、御伽草子といふ。その文體趣向、素より彼に比すべくもあらず。されど、次期に至り、隆盛を極むる小說等は、全くこれに基づけるものとゐるべし。今その文一節をあげん。

一寸法師の中の一節

中頃のことなるに、津の國難波の里に、おうちと姥と侍り。うば四十に及ぶまで、子のなきことを悲しみ、住吉にまゐり、なき子を祈り申すに、大明神、あはれとおぼしめして、四十一と申すに、たゞならずなりぬれば、おうち喜び限りなし。やがて十月と申すに、いつくしきをのこをまうけたり。さりながら生れおちて後、せい一寸ありければ、やがて其名を一寸ぼうしと名づけられたり。年月をふるほどに、はや、十二三になるまでそだてぬれども、せいも人ならず、つく〳〵と思ひけるは、たゞものにてはあらず、たゞばけ物ふせいにてこそ候へ。われいかなる罪のむくいにて、かやうのものをば、住吉より賜はりたるぞや、あさましさよと、見るめもふびんなり。

夫婦思ひけるやうは、あの一寸法師めを、いづかたへも、やらばやと思ひけると申せば、やがて一寸法師、此のよし承り、親にもかやうに思はるゝは、くちをしき次第かな、いづ方へもゆかばやと思ひ、刀なくては、いかゞやと思ひ、針を一つ姥に乞ひ給へば、とりいだしたびにける。すなはち麥藁にて、つかさやをこしらへ、都へのぼらばやと思ひしが、しせん、舟なくてはいかゞあるべきとて、又姥に、ごきと箸とたべと申しうけなどりをしくとむれども、たち出でにけり。住吉の浦より、ごきを舟としてうちのりて、都へぞのぼりける。

すみなれし難波のうらを、立ちいで、、都へいそぐわがこゝろかな。

かくて、烏羽の津にもつきしかば、そこもとにのりすて、、都にのぼり、こゝやかしこと見るほどに、四條五條の有樣、心も詞にもおよばれず。さて、三條の宰相殿と申す人のもとにたちよりて、物申さんといひければ、宰相殿はきこしめし、おもしろき聲と聞き、緣のはたへたち出で、、御覽ずれど人もなし。

一寸法師、かくて、人にもふみ殺されんとて、ありつる下駄の下にて、物申さんと申せば、宰相殿、ふしぎのことかな、人は見えずして、おもしろき聲にて呼ばる、、出で、見ばやとおぼしめし、そこなる足駄、はかんとめされければ、あしだの下より、人な踏ませ給ひそと申す。ふしぎにおもひみれば、いつきやうなるものにて有りけり。宰相殿御覽じて、げにもおもしろきものなりとて、御わらひなされけり。（下略）（御伽草子）

第三章　和歌及び連歌

前期以來、和歌の範圍は、益、狹隘となりしが、この期に至りては、又、古今傳授などいふこと起りて、その流派は、二條家傳、堺傳授、奈良傳授など稱し、歌道は、全く一家の秘傳となれり。當時勅撰には、花園上皇御自撰の風雅集、以下數集あり。

かくて、後花園天皇の永享年中、飛鳥井雅世、新續古今集を撰びたるを最終として、中世以來、歷世繼續したる勅撰の擧は、

全く絶えはてぬ。彼の延喜の古今集よりこの集まで、世に二十一代集と稱す。

かく和歌は、衰運に向ひたりといへども、當時、猶この道に巧みなるものありき。卽ち、頓阿、兼好、淨辨、慶運は、その四天王と稱せられ、その他、將軍義政、同義尙の如きも、詠歌に長じたり。私撰には、宗良親王の新葉集を始めとし、頓阿等の家集も少からず。

さて連歌は、中古金葉集に載せられたるを、始めとして、前期に至りて、稍、發達をなしたり。その歌體は、短歌を上句下句に分ちて、互に連接したるものなり。而して、後には、五十句、百句、乃至千句にも及べるものあり。これ、漢詩の聯句と、畧、同じきものなれど、彼は數人集まりて一篇をなし、これは交互に連接して、おほくの短歌を作るものなり。要するに、連歌は、當時、窮屈なりし和歌の法式以外にたちて、詞の制限もなく、自由に詠出せるものなれば、歌の眞價は、却て、これに存せりといふべし。

當時、連歌の作者には、有名なる宗祇法師あり。勅命を奉じて、筑波集を撰びぬ。その他、二條良基、僧頓阿の如きは、何れもこれをよくせり。然して、その行はるゝ所、ひろく、下流社會にも及びて、江戸時代に於ける、俳諧俳句の基をなせり。

短歌

百首歌讀み侍りける中に　冷泉入道前右大臣

九重の　みやこにはるや　たちぬらん
あまつ雲ゐの　けさはかすめる

吉野の行宮にて、百首歌よませ給ふける中に、聞郭公と
いふ事を。　中宮

聞きなる、　やまほとゝきす　この比や
　　みやこの人は　初音まつらん　後醍醐天皇御製

題しらず

まだなれぬ　いたやの軒の　むらしぐれ
　　おとをきくにも　ぬる、袖かな。

（以上新葉和歌集）

連歌

秀衡征伐のため、奥州にむかひ侍りける時、名取川を渡るとて、

われひとり　けふの軍に　名とり川　前右大將頼朝

君もろともに　かちわたりせん　平　景　時

修行し侍りけるに、奈良路を行くとて、尾もなき山の丸木を見て、

世の中は　まんまるにこそ　見えにけれ。と侍るに、　西住法師

あそこもこゝも　すみのつかねば。　西行法師

龜山殿にて、大井川の鵜飼をめして、主水司の奉りけるひを、賜はせ
ければ、鵜飼見しり侍らざるにや、河の中にすてたりけるに、

かゞりならぬ　ひをばえしらぬ　飼鵜かな　龜山院御製

なつは氷らぬ　みづにならひて　權中納言公雄

（以上菟玖波集）

第四章　謠曲

謠曲は、能樂の謠ひ物にして、彼の平家物語、今樣、朗詠の謠ひぶりを、折衷して作り出せるものなり。その文章、詩歌、佛語の佳句を挿み、ことに懸詞を用ひ、聲調を整へたる所、普通の散文と、趣きを異にせり。然して、その結構は、歴史上の事實、もしくは、佛教の教理を、巧みに附會せるものにて、これに、神事、幽靈、現在、祝言等の四種類あり。

將軍義滿の時、大和の人、結崎次郎といふもの、この謠曲を以て、從來の田樂、散樂に、合せ歌ひしかば、大に賞賛せられたり。後、將軍義政、また名手をひきて、これを奬勵せしかば、大に世に傳播せり。當時、この技をなすものに、觀世、金春、金剛、寶生の四派あり。之を、四座の能樂家と稱せり。

謠曲の作者は、古來詳かならず。四座の能樂家は、たゞその曲節を、作りしものにて、文句の作者は、素より他にありしなるべし。江口、山姥は、僧一休の作、率等婆小町は、寶性院宥快の作なりと、傳へらる。要するに、この作者は、何れもみな、學殖ある當時の僧侶等の手に、なりたるものならん。この他、滑稽諧謔を旨としたる、狂言と稱するものあれど、その文、謠曲の如く、精巧なるものにあらず。

［白樂天］の一節

ワキ詞［そも〳〵］是は唐の太子の賓客、白樂天とは我事なり。扨も是より東に當つて國あり。名を日本と名づく。急ぎ彼土に渡り、日本の智識を計れとの宣旨に任せ、唯今海路に趣き候ふ。

次第［舟漕ぎ出でゝ日本の、其方の國を尋ねん。

道行［東海の波路遙に行く舟の、跡に入日の影殘る、雲の旗手の天つ空、月また出づる其方より、山見えそめて程もなく、日本の地にも着きにけり。

詞［海路を經て急ぎ候ふ程に、是ははや日本の地にも着きて候ふ。暫く此所に碇をおろし、日本のやうを詠めばやと存じ候ふ。

シテツレ一聲［さらぬひの、筑紫の海の朝ぼらけ、月のみ殘るけしきかな。

シテサシ［巨水漫々として碧浪天を浸し。

二人［越を辭せし范蠡が、扁舟に棹を移すなる、五湖の煙の波の上、かくやと思ひ知られたり。あらおもしろの海上やな。

歌［松浦潟、西に山なき有明の月の入る、雲も浮ぶや沖つ舟、互にかゝる朝まだき、海は其方か唐土の、船路の旅も遠からで、一夜泊りと聞くからに、月も

程なき名殘かな。

ワキ詞「我萬里の波濤を凌ぎ、日本の地に着きぬ。是に小船一艘浮べり、見れば漁翁なり。如何にあれなるは日本の者か。

シテ「さん候ふ。是は日本の漁翁にて候ふ。御身は唐の白樂天にてましますな。

ワキ「不思儀やな。始めて此土に渡りたるを、白樂天と見る事は、何の故にてあるやらん。

ツレ「御身は漢土の人なれども、名は先立つて日本に聞こゆ。隱れなければ申すなり。

ワキ「たとひ其名は聞こゆども、それぞとやがて見知る事、あるべき事ども思はれず。

二人「日本の智慧を計らんとて、樂天來り給ふべきとの、聞こえは昔き日の本に、西を詠めて沖の方より、船だに見ゆれば人毎に、すはやそれぞと心づくしに。

地「今や〳〵と松浦舟、沖より見えて隱れなき、唐土船の唐人を、樂天と見る事は、何か空目なるべき。むづかしやことさやぐ、唐人なれば御詞をも、とても聞きも知らばこそ、あらよしなや、釣竿の暇をしや釣垂んれ。

ワキ詞「なほ〳〵尋ぬべき事あり。舟を近付け候へ。如何に漁翁。扨此頃日本には何事を翫ぶぞ。

シテ詞「扨唐には、何事を翫び給ひ候ふぞ。

ワキ「唐には詩を作つて遊ぶよ。

シテ詞「日本には歌をよみて、人の心を慰め候ふ。

ワキ「そも歌とは如何に。

シテ「夫れ天竺の靈文を唐土の詩賦とし、唐土の詩賦を以て我朝の歌とす。されば三國を和らげ來るを以て、大きに和らぐと書いて大和歌と讀めり。しろし召されて候へども、翁が心を御覽せん爲め候ふな。

ワキ「いや其儀にてはなし。いでさらば、目前の景色を詩に作つて聞かせう。青苔衣を負ひて、巖の肩にかゝり、白雲帶に似て、山の腰をめぐる。心得たるか漁翁。

シテ「青苔とは青き苔の、巖の肩にかゝれるが、衣に似たりとかや。白雲帶に

似て、山の腰をめぐる。おもしろし〳〵、日本の歌もたゞ是候ふよ。苦衣着たる巖はさもなくて、衣着ぬ山の帶をするかな。

ワキ「不思儀やな。其身は賤しき漁翁なるが、かく心ある詠歌を連ぬる、其身は如何なる人やらん。

シテ「人がましやな。名もなき者なり。されども歌を詠む事は、人間のみに限るべからず、生きとし生ける物毎に、歌を讀まぬは無き物を。

ワキ「そもや生きとし生ける物とは、扨は鳥類畜類までも。

ワキ「和歌を詠ずる其ためし。

ワキ「和國に於て。

シテ「證歌多し。

地「花に鳴く鶯、水に住める蛙まで、唐土は知らず日本には歌をよみ候ふが。翁も大和歌をば、かたの如くよむなり。（下略）

第六編　江戸時代の文學

第一章　總說

後陽成天皇……孝明天皇
紀元二二六四……二五二六

上下三千年を通じ、我が國に於て、文學の隆盛なるは、實に平安時代と、この時代となり。されど、平安時代の文學は、その範圍狹小にして、おほむね、上流社會にのみ行はれたりしが、この期は全く然らず。上將軍を始め、下農商に至るまで、殆と及ばざるはなし。これ卽ち、前古に例なき所なり。されば、漢學はいふも更なり、稗史小說に至るまで、一として發達せざるはなかりき。明治文學の基礎は、全くこゝに定まれりといふべし。

すでに、述べたる如く、室町時代にありては、戰亂うちつゞきて、文學の衰退、特に甚しかりき。德川家康、天下を一統し、幕府を、江戸に開くに當り、まづ、當時の人心を和げ、天下の泰平を保たんには、文學の普及を計るに若かずとて、藤原惺窩、林道春等を召して、經書を講ぜしめ、また一方には、廣く、古書の刊行を企て、自らも進みて、學問に從事せり。これ、當期に於ける文學振興の端緒なり。後、代々の將軍、みなこの意をつぎ、文敎奬勵に、力を注ぎたれば、その功果著くして、未だ數代を經ざるに、天下靡然として、これにかたむけり。五代將軍綱吉、ことに、意を儒學に注ぎ、かつて、林氏の私學たる昌平校を、湯島に移し、祭田學料を備へ、子弟を敎育せり。されば、海內の諸侯これに倣ひ、各、爭ひて、藩學を設くるに至りぬ。而して、林氏は、世々大學頭として、學門界の統領たり。

かく、上下共に、學問の奬勵を計りたれば、獨り漢學のみならず、あらゆる文學も勃興せんとする勢あり。就中、國學の復古は、ここに、注目すべき要點にして、その、各種の文學に與へたる影響は、決して尠しとせず。今まづ、當時の文學者をあぐれば、儒學には、木下順庵、伊藤仁齋、中江藤樹、貝原益軒等あり。國學には、下河邊長流、僧契沖、北村季吟、荷田春滿、賀茂眞淵等あり。俳家には、西山宗因、松尾芭蕉等あり。その他、戲曲小說には、近松門左衞門、井原西鶴等の大家、陸續として起り、各、立ちて一方に雄飛せり。これ卽ち、元祿前後の文學界の有樣なり。

而して、寬延、寶曆以後に至りては、天下の大勢、江戸に集中すると共に、學者各來りて、門戸を張るものおほくなりぬ。賀茂

眞淵、及びその門下を始めとし、その他、戯曲小説家の如き、皆然らざるはなし、今、その當時の有樣を概説せんに、漢學者には、室鳩巣等を始めとし、柴野栗山、古賀精里、尾藤二州（以上寛政の三學士と云ふ）等あり、國學者には、本居宣長、村田春海、橘千蔭等あり、俳家には、榎本其角、服部嵐雪、及び横井也有、谷口蕪村、戯曲家には、近松半二、竹田出雲等あり。太田蜀山人、石川雅望等の如きは、狂歌をよくし、山東京傳、柳亭種彦、瀧澤馬琴等の如き、小説の大家、各、輩出せり。

以上は、當期二百五十年間の、文學發達の梗概なり。而して、その各種中の重なるものは、漢學者の和漢混和文、次は國學者の雅文、及び和歌、その他、俳諧、俳文を始め、狂歌、狂文、戯曲、小説等なり。これ、中古以來、發達し來れる文學は、この時代において圓熟し、かゝる燦爛たる光輝を、放てるものといふべし、以下、順次、各種につきて説明すべし。

第二章　漢學者の和漢混和文

混和文は、すでに中古に起りて、彼の今昔物語、及び戰記文等、皆この體によれり。而して、この文體は解し易くして、事理を記述するに、適せるものなるが故に、愈、發達して、當期に至れるものなり。ことに、當時の漢學者は、己が學説を發表せんがために、つとめて、この體を用ひたるものおほし。これ、漢文は、當時の實用に適せざりしを以てなり。然して、現今の普通文の基は、又こゝに存せり。今この種の文を大別し、教訓、歴史、雜著、の三種とす。

教訓文　こは、漢學者の道德說を、平易に記述せるものにして、その種類頗るおほし。まづ、朝山素心の清水物語、中江藤樹の翁問答、中村惕齋の姫鏡、貝原益軒の樂訓、養生訓の類、及び熊澤蕃山の集義和書等なり。清水物語は、觀音詣の老婆、老翁を留めて、儒道の大意を、說き聞かせたるを趣向として、通俗に、了解し易く記述せり。また、姫鏡といひ、益軒の敎訓書といひ、その通俗平易なること、皆然り。これ等の文章、さ程、名文にはあらざれども、高尙なる學理を、よく、平易に書きなせる所、その特色にして、學殖深き益軒等にあらざれば、決して能はざる所なり。

益軒、名は篤信、筑前の人、世々黑田侯に仕へて、醫を業とせり。明曆中出でゝ、松永遐年、木下順庵等につきて、儒を學びしも、おほくは、獨學になれりといふ。後、京都に門を開き、子弟を敎導して、名聲世に揚り、海內無双と稱せらる。その學、博覽洽聞、和漢の書、涉獵せざるもの殆ど少く、勤勉、また人に超えたり。平生、謙遜勤愼を主として、人と爭はず、暇あれば名勝故跡を探り、天下に、足跡普かりき。その著書百餘種中、紀行文の多きも、全くこれがためなりといふ。正德四年、年八十五にて沒しぬ。

（此の種の例證、例によりて省略す、以下亦同じ）

歷史文　この種の文は、新井白石の藩翰譜、讀史餘論、湯淺常山の常山記談、成島司直の德川實記等なり。

藩翰譜は、列侯三百三十餘家の傳記を、記したるものにて、文體は、中古以降の戰記文より出でゝ、別に一體をなせり。その

筆力遒健にして、漢に偏せず、和に流れず、錯綜極まりなき、當時の狀態を描寫して、殆ど眞に迫れり。讀史餘論は、將軍家宣のために、國史を進講せし時の稿本なり。その文は、藩翰譜の如く流暢ならざれども、議論の明確なる所、捨て難き筆力なり。常山記談は、戰國以來の、人物、逸話等を記したるものにて、その文、見るべきものあれど、素より、白石の文には、比すべきにあらず、

白石、名は君美、明曆三年江戸に生る。幼より聰慧、長じて、意を經史の學にひそめ、その木下順庵の門にあるや、已に、該博精通の評高かりき。後、將軍家宣の儒官となり、幕政に參與する所おほし。正德三年、將軍薨ずるに及び、隱退して客を辭し、專ら筆硯に從へり。白石、學は和漢洋に通じて、その著頗る多く、皆、實用有益の書にして、學者の參考となるもの少からず。その自傳を記したる折たく柴の記、また見るべきものなり。その他、東雅、同文通考等の如き語學の著書もあり。又、西洋奇聞、采覽異言等の著は、我が國、洋學の權輿ともいふべし。享保十年五月歿す、年六十九。

雜著文　この種の文には、漫錄、日記、紀行、論說、記序、考證等の各種あり。まづ、雨森芳洲の多波禮草等を始めとし、室鳩巢の駿臺雜話、柳澤淇園の雲萍雜誌、その他、伊藤東涯の秉燭談、荻生徂徠の蘐園餘談、大宰春臺の經濟錄、及び獨語、太田錦城の梧窓漫筆、藤田東湖の常陸帶等、すべて、何々隨筆、何々雜錄など稱せるもの、數ふべくもあらず。以上、多くは餘暇の雜著にして、各、多少の差異あれども、その文體おほむね、異なる所

なし。中にも、多波禮草、雲萍雜誌の如きは、その傑出せるものといふべし。駿臺雜話は、この二書に比すれば、やゝ拮据なるを免れず。ここに、此の書は、將軍に上りたるものなれば、つとめて、文中の風趣を添へんとて、故事、故語を引用すること、繁多なる傾きあり。されど、その文、意味深重にして、筆鋒の謹嚴なる所、一代の名文たるに恥ぢず。

鳩巣、名は直清、年十四にして加州侯に仕へ、後、京都に出でゝ、木下順庵の門に入る。正德元年、新井白石に薦められて、幕府の儒官となり、邸を駿河臺に賜はる。世呼びて、駿臺先生と稱す。將軍吉宗の時、幕政に參して獻替する所おほし。その學、博く和漢に通じ、ここに、和歌をもよくせり。著す所、駿臺雜話を始めとし、六論衍記和解等おほし。享保十九年、七十七歳にて沒しぬ。

第三章　國學の復興及び國學者の輩出

既に、總說に述べたるが如く、當時、學問進歩の結果として、學者おほく輩出し、殊に漢學者は、主として、朱氏學を唱導したりしが、幾くもなく、その學派以外に、復古說を立てゝ、一方に雄視するものあるに至れり。これ、學問の發達上、自然の勢といふべし。而して、この勢の及ぶ所、獨り、漢學のみに留まらずして、國學も亦、大に復興せんとす。

さきに、林道春等、幕命を奉じて國史を編輯せり。然るに、往々、我が國體にもとり、內外本末を、あやまれる所ありければ、德川光圀の如きは、いたくこれを慨きて、親ら國史撰修を企圖

す。功成る。これ即ち、大日本史なり。光圀、また扶桑拾葉集等を編す。これ等は、實に國學復興に、先鞭をつけたるものといふべし。此の時に當り、難波の僧契沖、又國學の衰退を慨き、思を、上代の文學に潜め、光圀の命によりて、まづ萬葉代匠記を著し、その他、音韻を論じ、假名遣ひの誤りを正せるなど、斯學のため、盡す所おほかりき。かくて、荷田春滿、京都に起り、又、力をこゝに致しゝかば、復興の氣運愈、進みぬ。春滿は、我が國體の尊嚴、内外本末を、世に明かに知らしめんには、まづ、古典を研究して、上古のありさまを、知るにありとして、專ら、意をその方面に注ぎたりき。以後、賀茂眞淵、本居宣長等次いでおこり、盛に、その意を唱導す。こゝに於て、天下靡然として應ずるに至りぬ。今、左にその重なるものゝ、畧傳を掲げん。

契沖は、攝津尼崎の人にして、幼より佛に歸し、後大阪に住し圓珠庵と號す。古學の研究に心を委ね、その著す所頗るおほし。萬葉代匠記を始めとし、その他、古今集には、餘材抄、伊勢物語には勢語臆斷、音韻の著には和學正濫抄等あり。これその重なるものなり。元祿十四年、六十二にて沒す、當時、また契沖の畏友に、下河邊長流あり。大和の人にして、古典に精通せり。されど、その性磊落、從つて著書甚だ少し。この二人は、前の德川光圀と共に、國學復古の開祖と稱せらる。

北村季吟、もと紀伊の人なり。拾穗軒と號す。醫を業とし、傍、松永貞德の門に入り、和歌、連歌をもよくせり。幕府に召され、法印に任ぜらる。世、これを國學博士と稱す。著書甚多く、ここに、力を古書の註釋に注ぎたり。源氏物語湖月抄、萬葉拾穗抄、枕

草子春曙抄、八代集抄、徒然草文段抄等、その重なるものにして、後學に裨益する所大なり。寶永二年、八十八歳にして沒す。子孫世々家學をつぎて世に知らる。

荷田春滿、氏を羽倉と稱す。世々、伏見稻荷社の祠官たり。夙に、國學の替廢を歎し、眼を國史、律令、典故に屬し、心を上代の歌文に潛め、斯學の復興を以て自任せり。享保の頃、將軍吉宗の召しに應じ、東下して、古書の信僞を匡したり。將軍、その學識の博きを感じ、江戸にありて、親しく仕へんことを勸めたりしも、老を以て辭し、義子在滿を以て、これに代らしめたり。晩年、京都に、國學の學校を、建設せん事を圖りしも、遂に果さず。元文元年、六十八歳にて沒せり。

賀茂眞淵、氏は岡部、號を縣居と稱す。遠州の人なり。享保中、荷田春滿につきて國學を學び、芳名、夙に高かりき。後江戸に出で、田安宗武に召され、寵遇ことに厚かりき。嘗て曰はく、契冲は、開墾したりしも、樹藝を終へずして死せり。吾が師の大人は、樹藝したりしも、未だ收穫を終へずして逝けりと。蓋し、收穫の功を以て、自ら任じたるものゝ如し。本居宣長、村田春海橘千蔭、荒木田久老、塙保己一等は、皆この門より出づ。明和六年沒す、年七十三、その學識、該博にして、ことに、和歌は、萬葉の骨髓を得たり。その著に、萬葉考、同別記、冠辭考、祝詞考、古今集打聽等、重なるものなり。その他、歌文の集には、賀茂翁家集、縣居歌集などあり。

本居宣長は、伊勢松坂の人、鈴の屋と號し、醫を業とす。年三十二にして、縣居の門に入り、爾後、專ら國史、律令、歌書、物語等の

研究に、力を集め、益、國學の普及を計り、未だ、先輩諸家の果さゞりし、學説の蘊奥を極め、又、儒者等の、内外の別を謬り、國體を損するものあるを慨き、その匡正を計りたるなど、その功績、必ずしも、學問の上のみにあらず。されば、敎を請はんとて、遠近、集まるもの、前後六百餘人の多きに至れりといふ。享和元年、七十二歳にて沒せり。その著の重なるものは、古事記傳、萬葉玉の小琴、源氏玉の小櫛、古今集遠鏡、その他、語學上の著書には、紐鏡、詞の玉緒、隨筆には玉勝間、歌文には鈴の屋集等おほし。就中、古事記傳は、殆ど終世の大著述にて、前後三十五年にして、その稿を終へたりといふ。その考證の精密なる、議論の卓拔なる、他に比類なし。實に、上代の言語、風俗、典故を知らんには、かくべからざる至寶なりといふべし。

塙保己一は、武藏國兒玉郡の人なり。七歳にして明を失ふ。性、强記にして學を好み、初め、縣居門に入りて、國學をまなびしが、後、一家を起し、その名聲天下に振ふ。寛政年間、幕府にこひて、和學講談所を設く、幕府よつて、總檢校に任ず。正續群書類從二千餘卷は、實に、保己一の編集になりたるものなり。然して、その學は、ことに律令、有識、故實にありき。屋代弘賢、中山信名、石原正明等は、その門下より出づ。文政四年歿す、年七十六。高田與清、本姓小山田、號を松の屋と號す。武藏多摩郡の人なり。村田春海の門に入り、國學を學び、その名、世に揚がる。文政十八年、三緣山學士となる。後、水戸侯に仕へ、命を承けて、八洲文藻百七十二卷を撰び、又、扶桑拾葉集の註釋を著せり。その他、私に著はせる處、甚おほし。十六夜日記殘月抄、擁書漫錄、相

馬日記等見るべきもの多し。弘化四年沒す。年六十五。平田篤胤、伴信友と共に、三大家と並稱せらる。

その他、寛政前後には、學者の輩出たほく、谷川士清、富士谷成章など、各一派をたてたり。又、彼の縣居門の門下を始め、鈴の屋門には、本居春庭、同大平を始め、藤井高尙、平田篤胤、伴信友等あり。その他、內山眞龍、橘守部等、一々枚擧するに遑あらず。

これ等、多數の學者は、あらゆる方面に向ひて、その研究を勤めたれば、國學は、愈、發達して、裨益を、後世に及ぼせるもの尠しとせず。

第四章　國學者の散文及び和歌

國學者の散文には、論說、考證、日記、漫錄等、その種類甚だ多く、從ひて、文體も各、異なり。されど、要するに、擬古文と和漢混和文との、二體に過ぎず。擬古文は、大概、平安朝の文體に、模擬し、たるものにて、當時の國學者は、好みてこの體を用ひたり。然してその混和文は、彼の漢學者の文に比すれば、やゝ、和に近くして、專ら、拮掘なる漢字を避けたり。又、當時通俗を主としたる、所謂、言文一致體の著も少からず。平田篤胤の出定笑語俗神道大意等は、その尤なるものなり。今左に、以上の例二三を擧げて、その一般を知らしめん。

萬葉考序の一節

いとしも、上つ代の歌は、人のまごゝろの限りにして、そのさま、和くも、かたくも、强くも、悲しくも、四つの時なす、たちかへりつゝ、前しりへ、定めいひがたしや、中つ代にうつろひて、高市岡本の宮の御時の比よりをいはゝ、み

冬つき春さり來て、雪氷のとけゆくがごとし。これを始のうつろひといはん。藤原の宮となりては、大海の原に、けしきある島どものうかべらむさまして、おもしろき勢ぞ出できたる。これぞ、二たびのうつろひなり。奈良の宮の初には、此の勢をまねびうつせしまゝに、おのがものともなく、うらせばくなりぬ。これぞ、三たびのうつろひなり。其の宮の中つ頃には、ゆかしき隈もなき海山を、風はやき日に見んがごと、あらびたる姿と成りぬ。是ぞ、四度のうつろひなり。それゆ後の哥は、此の集にはのらず。古今哥集に、よみ人しらずとふ中の古きしらべなるぞ、此の宮の末ゆ、今の都のはじめの哥なり。そは、彼の荒びたりしが、うらうへになりて、清らなる庭に、山ぶきの、咲きとをめらんなして、ひたぶる、妹に似る姿となりにたり。これぞ、五度の終のかはりめなりける。（中略）柿木朝臣人麻呂は、古へならず後ならず、一人の姿にして、和魂いたらぬ隈なんなき。その長哥、勢は、雲風にのりて、み空行く龍の如く、言は、大海の原に八百潮の湧くが如し。短哥のしらべは、葛城の襲津彦、眞弓を引きならさんなせり。深き悲みをいふ時は、千早振るものをも歎かしむべし。山上憶良は、言ふつゝかにして心愛し。久米のとものの雄々しき姿して、たつ舞せらんおもほゆ。短哥の中に、たゞ言にいへるは、いふべくもなし。山部宿禰赤人は、人萬呂とうらうへなり。長哥は、心も言も、管に清らを盡せり。短哥こそ、是も一人の姿なれ。巧をなさず、有がまに〳〵いひたるが、妙なる哥と成りにしは、本の心の高きが至りなり。譬へば、檳榔の車して、大道をわたるぬしの、あから目もせぬが如し。（中略）伴宿禰旅人のまへつきみの、短歌は、をゝしくてかなし。酒をよめるに、すめら御國のこゝろをいへるはたふとし。こはしらべをすてゝ、心をぞとるべき。長きはしらず。それが繼なる家持のぬしは、事をよくしるしてにほひなし。たとへば、いでましの大みともものつらを、めでたく記せるふみのごとし。短哥はいと多かれど、あらびてうらぐはしきは、まれになんある。これよりさきに、三方の沙彌、久米の禪師が、古きすがたのうるはしき、又長の忌寸意吉麻呂、春日くらのおほと老、が心しらず。その外にもこれかれと、こゝにつへさず。田邊史さちまろ、笠朝臣金村、高橋連蟲萬呂などは、いたづらに、いにしへを、いひうつせしものなれば、強きが如くにして下よわし。をみなにては、額田姫王は、いにしへのみやび人なり。春秋のあらそひを判へりしなん、をみなごゝろのをかしき。大

伯皇女の御歌は、事にふれて上にいひつ、石川郎女がなよびたるすがた、譽謝姫王のよろしきしらべ、大伴坂上の郎女の歌は、氏の手ぶりのしるゝ事にも、あたりぬべきさまなり。また歌ぬしゑられぬにこそ、猶おほけれ。藤原の宮つくりに役てる民が歌は、おぼろけにあらず。同じ御井の歌のふるこゝを、和しいひてあやあるは、其代の黒人、人萬侶の外にすぐれにたり。すべて、短歌にひでたるさはなれど、擧るにたへんやは。

古事記傳一の卷の一節

西土の文字の、始めに渡り參來つるは、記に、應神天皇の御世に、百濟の國より、和邇吉師てふ人につけて、論語と千字文とを貢りしことある。此の時よりなるべし。なほ懷風藻の序などにも、此のおもむき見えたれば、奈良のころも、然言ひ傳へたるなるべし。それよりさきにも、外國人の參り入りしは、書紀に、崇神天皇の御世に、始めて、彌摩那の國人、又垂仁天皇の御世に、新羅の國王の子天之日矛などあれども、書籍はいまだ渡らざりけむ。そも〳〵、異國とこと通ふことは、漢國の書には、かのくにの漢といひし代より、御國の使、かしこに至れりつと云へれども、皇朝には、さらに云ろしめさぬ事にして、此は、くさ〴〵論ひありて別に云るせり。彼の國に、大御使を遣はし、は、遙かに後、推古天皇の御世ぞ始めなりける。又韓の國々の、云たしく仕へ奉りしことは、神功皇后の、かの國言向けましゝよりの事なれば、書籍のわたり來しも、決くかの和邇がまゐり來し時よりのこと、ぞ思はるゝ、然るに、神武天皇の御時よりも、既く、文字はありしこと思ふ人もあれど、そは書紀を一わたり見て、かのかざり多かることをよくも考へず、文のまゝに、意得るから、さも思ふぞかし。

和歌は、中世以降、衰運の後をうけて、當期に至りても、なほ、師範家の拘束を免れざるものあり。元祿、寶永の頃、江戸に戸田茂睡ありて、從來の師範家の弊をあげ、梨の本集を著して、論破したりき。而して、當時の國學者は、皆詠歌に巧みにして、各、その特殊の歌風を起すに至れり。是に於て、彼の傳授、秘傳

の弊、漸くやみ、轉じて、歌學は眞正なるものとなれり。賀茂眞淵のにひまなび、歌意考、香川景樹の新學異見等は、その歌學書の重なるものなり。かくて、その歌體は、從來の如く、範圍狹小なるものにあらずして、あるは、萬葉風の古調に擬し、あるは古今、新古今集の歌體を慕ふものありて、歌道愈、進歩せり。當期の歌人には、契冲、眞淵等を始めとし、村田春海、橘千蔭、小澤蘆庵、千種有功、香川景樹等、皆人の知れる所なり。今重なる歌人の傳、二三を擧げん。

小澤蘆庵は、尾張の人なり。夙に、冷泉爲村卿につきて、和歌を學ぶ。後、京都に門を開きて、名聲遠近に聞こゆ。伴蒿蹊、橘千蔭、香川景樹等と、親しく相往來せり。當時、京都にて、蒿溪、澄月、大愚等の歌人おほかりしが、蘆庵の名、尤高かりき。その歌、古今の諸體に通じ、聊かも、拘泥することなく、極めて秀拔優雅なり。世稱して、平安中興の良師なりといへり。享和元年、七十九歳にして沒す。その著、振分髪、蘆庵集など見るべきものおほし。

伴蒿蹊は、近江の人、名は資房、閑田子と號す。有賀長伯の門に入り、國學を修め、また漢學にも通ぜり。就中、國史に精しく、歌文に妙を得たり。芦庵、澄月、涌蓮と共に、和歌の四天王と稱せらる、文化三年沒す、年七十四。著書頗多く、國文世々の跡、近世畸人傳、閑田文草、閑田耕筆など、尤重なるものなり。

香川景樹は、因幡の人、本姓は新井氏、桂園と號し、德大寺家の家士、香川某の家を繼ぎ、從五位下肥後守たり。和歌を清水貞固に、漢學を堀某に學ぶ。景樹、學識ともに高く、近世中の歌學

者を以て稱せられ、門人、千を以て數ふるに至る。穗井田忠友、八田知紀等は、その尤も、俊秀なるものなり。その歌風は、意を、古の自然なるにとり、詞を、今に詠出するを以てしたり。かつて、古今集の正解をなさんと欲し、日夜刻苦して、古今集正義を著す。その說、先輩の誤謬を辨じ、自己の見を張り、前人未發の新解を下せり。その他、土佐日記創見、新學異見、桂園一枝等の著おほし。天保十四年沒す、年七十四。

短歌

海邊霞　釋契冲

藻鹽やく　難波の浦の　八重がすみ
ひとへは海士が　しわざなりけり

旅の歌の中に　同

一夜かる　やどだにあるを　ふる里は
なにごゝちして　別れきぬらん　荷田春滿

河邊山吹

いはぬ色に　咲く山ぶきも　よし野川
うつりゆく春の　影ぞみだるゝ　同

書

ふみわけよ　やまとにはあらぬ　から鳥の
跡を見るのみ　人の道かは　加茂眞淵

花

うら〳〵と　のどけき春の　こゝろより
にほひ出でたる　やま櫻かな　同

低月

鳴　鳥　の　かつしか早稻の　にひしぼり
くみつゝをれば　月かたぶきぬ

嵐

信濃なる　すがのあら野を　とぶ鷺の
つばさもたわに　吹く嵐かな　本居宣長

開春月

心せよ　かすみもふかき　春の夜は
つきだにもらぬ　須磨のせきもり　同

遠村煙

さととほみ　たどるすゑ野の　夕ぐれに
しるべうれしく　たつ煙かな　小澤蘆庵

冬たちて、風のあらましくふくに、

松にふく　風もあらしに　なりにけり
きた窓ふたげ　ふゆごもりせん　同

雲間より三日月のほの見ゆるを

村くもを　つなげるいと、　見るばかり
ほそくかゝれる　三日月の影　村田春海

富士山

心あてに　見し白くもは　それならで
思はぬそらに　はるゝ富士のね　同

蓮露

はちす葉の　上とのみやは　あだに見ん
露こそ人の　世のたぐひなれ　加藤千蔭

霞中春雨

すみた川　みのきてくだす　いかだしの
霞むあしたの　雨をこそしれ　同

木枯

ちりはてゝ　空しき枝を　いつまでか
吹きすさぶらん　木枯しのかせ　香川景樹

事につき時にふれたる

わか門の　まへの棚ばし　とりはなて
折る人おほし　やまぶきのはな　同

雲をのみ　しのぐと思ひし　松か枝は
土につくまで　なりにけるかな

寒月　同

てる月の　かげのちりくる　心地して
よるゆく袖に　たまるゆきかな

長歌

吉野山の花を見てよめる　賀茂眞淵

ことさへぐ　人の國にも　聞え來ず　吾みかどにも
たぐひなき　よしの高根の　さくらばな　咲のさかりは
馬なべて　とほくも見さけ　杖つきて　峰にものぼり
見る人の　かたりにすれば　聞く人の　いつもつかへて
天雲の　むかぶす極み　谷ぐゝの　さわたる限り
めでぬ人　こひぬ人しも　なかりけり　しかはあれども
世の中に　さかしらをすと　ほこらへる　おきながともは
やほよろづ　よろづのことら　聞きしより　見のおとるぞと
いひつらひ　ありなみするを　峰みれば　八重白雲か
谷みれば　大雪降ると　天つちに　心おどろき
世の中に　事も絶えつゝ　行く牛の　おそき翁が
うつゆふの　せかりし心　悔もくいたる

反歌

もろこしの　人に見せばや　みよしの、
吉野の山の　やま櫻花

山寺の秋の暮　村田春海

かたやまや　世をふる寺の　苦むしろ　おり居て見れば
どゞめえぬ　秋はかぎりと　もみち葉も　風にきほひて
おく霜に　あらそひかねて　白菊も　色ぞうつらふ
うつせみの　世はかくこそと　たき河の　はやくみし世を
くりかへし　忍びいでつゝ　かへるべき　家路もとはず
夕しぐれ　袂ぬらせば　ちりの身の　夢さませとや

岡のべの　松にこたふる　入相のかね

反歌

鐘の音　秋をとぢめて　山寺の
いはかき紅葉　散りはてにけり

第五章　俳諧俳文及び狂歌狂文

當期に於ける學問の發達は、獨り、漢學、國學に留まらずして、一方には、俳諧、俳文等の、平民的文學も勃興せり。俳諧とは、連歌より出でたるものにして、即ち、俳諧の連歌といふ略稱にて、通俗なる言語を用ひ、やゝ、滑稽の意を含めたるものなり。世に、發句、俳句と稱せらるるは、即ち、この俳諧の、上句なりと知るべし。その用語は、素より、和漢、雅俗の別なく、聊かも、拘泥する所なきは、和歌と趣きを異にせり。

俳諧は、すでに、前期中、宗祇、宗長等によりて唱導せられたり。ついで此の道に有名なる、山崎宗鑑、荒木田守武、松永貞德などが出づるあり。稍後れて、また、安原貞室西山宗因等起りて、大にその面目を改めたり。されば、その著には、まづ、宗鑑の犬筑波集、貞德の淀川、油粕、宗因のこうがらし等、皆、この法式を辨じたるものなり。ここに、西山宗因の如きは、從來の俳句の、氣骨なきを憂ひ、一の新機軸を案出し、天下を風靡せり。その體、頓智洒落、人をして、抱腹絶倒せしむるものあり。これを、檀林風といふ。元祿年間に至り、松尾芭蕉の出づるに及び、その風また一變せり。

松尾芭蕉、名は忠左衛門、伊賀の人なり。伊勢の藤堂家に仕へ、

後髮を剃り、風蘿坊と稱し、諸國を徧歷し、至る處、吟詠あらざるはなし。その學、和漢を兼ね、老佛の理に通じ、見識奇拔高尚なり。當時、難波に西山宗因ありて、盛に檀林風を唱へたりしが、芭蕉は、その輕姚詼諧に過ぎたるを慨して、之が革進を期せり。されば、その詠ずる所、皆、幽玄にして、氣韻、高尚ならざるものなく、實に、古今獨歩の體をなしぬ。これを、世に正風と稱す。元祿七年沒す。年五十一。その著、紀行には、奥の細道、更科紀行、句集には、幽蘭集、一葉集等あり。

芭蕉の門人には、其角、嵐雪、許六、去來、北枝、曾良、野坡、丈草、支考、越人等あり。これを、蕉門の十哲と稱す。就中、其角、嵐雪の如きは、其の秀俊にして、能く師道を祖述して、正風を、天下に瀰蔓せしむ。その他、天明、安永の頃には、谷口蕪村、雪中庵蓼太、女流には、加賀の千代、高桑蘭更などあり。ここに蕪村は、俳道に一派をたてたるものにして、その門下に知名のものおほし。

當時、また俳句と共に、俳文と稱するもの起れり。俳文は、まづ、芭蕉等の手になりたるものにて、俳人中、この文に長ぜるものおほかりき。その文、用語の簡潔にして、筆鋒の輕捷なるを以て特色とす。其角の類柑子、許六の風俗文選、横井也有の鶉衣等は、その有名なるものなり。殊に、鶉衣は、文章輕快、筆力自在にして、奇想の天外よりおち來るを覺えしむ。されど、中には、動もすれば、卑俗に傾きたるものも少からず。

狂歌は、その體、短歌と同じくして、ここに、諧謔諷刺の意を含めたるものなり。寛永中、大坂に淀屋个庵、京都に豊藏坊などいふもの、始めて、これを詠出せり。以後、狂歌、漸く世に行はれ、

天明、寛政に至りては、蔦唐丸、唐衣橘洲、大屋裏住、四方赤良、宿屋飯盛、平澤平格等、有名の作者あり。四方赤良は、太田覃、宿屋の飯盛は石川雅望の狂名なり。石川雅望は、逆旅の主人にして、六樹園と號し、和文をよくせり。嘗て、源氏物語の註釋、源注餘滴、及び辭書、雅言集覽を著し。後學を裨益すること多し。狂歌の集には、狂歌萬代集等、その他頗おほし。かく、狂歌の行はるゝにつれ、俳文の、俳句に伴ふが如く、自ら、狂文の一體あるに至れり。その文集の重なるものには、太田蜀山人の、よものあから、平澤平格の、岡持家集などなり。

發句

傘をきば、雨にも出でよ、夜半の月。　山崎宗鑑
手をついて、歌申しあぐる、蛙かな。　同
みな人の、蚤ねのたねや、秋のつき。　松永貞德
あはれなる、事きかさばや、郭公。　同
すゞしさの、かたまりなれや、夏の月。　安原貞室
世の中や、蝶々とまれ、かくもあれ。　西山宗因
やがて見よ、棒くらはせん、そばの花。　同
松に藤、鮪木にのぼる、氣色なり。　同
古池や、蛙とびこむ、水のおと。　松尾芭蕉
もろこしの、俳諧とはん、飛ぶ胡蝶。　同
荒海や、佐渡に横たふ、天のがは。　同
夏草や、つはものどもの、夢のあと。　同
雲をり〳〵、人をやすめる、月見かな。　同
秋の空、をのへの杉に、はなれけり。　寶井其角
名月や、たゝみの上に、松のかげ。　同
黄菊白菊、その外の名は、なくもがな。　服部嵐雪
布團きて、ねたる姿や、ひがしやま。　同

爐ふさいで、二日戻らぬ、主かな。　雪中庵蓼太
千なりや、蔓一すぢの、こゝろから。　加賀千代
易水に、葱流るゝ、寒さかな。　谷口雁村
時鳥、平安城をすぢかひに。　同
伽羅くさき、人の假寢や、おぼろ月。　同
蚊遣木に、たま〳〵沈の、匂ひかな。　高井九萱
鳥羽殿へ、御歌使や、夜半のゆき。　同

狂歌

郭公に有明の月かきたる繪に、　寐惚先生
ほと、ぎす　鳴きつるあとに　あきれたる

後徳大寺の　あり明の月

早春　四方赤良

生酔の　禮者を見れば　大道を
よこすぢかひに　はるは來にけり

へちまの繪に　木端
世の中は　何のへちまと　思へども
ぶらりとしては　暮されもせず

ある人によみてつかはしける　宿屋飯盛

歌よみは　へたこそよけれ　天地の
動き出しては　たまるものかは

柳　鹿都部真顔

あらそはぬ　風のやなぎの　糸にこそ
堪忍ぶくろ　ぬふべかりけれ

俳文

炮烙贊

一生を、つくろひなく、その日ぐらしに覺えたる、炮烙といふものは、園爐裏のもとに卑まるれども、その德を論ずれば、いとたうとし。鍋釜は、眷族も多くわかれて、藥鍋など號するは、銀に毛彫の繪樣にほこり、數奇の茶釜は、天

明蘆屋の作にたうとまれ、探幽が下絵に價をたかぶれば、臺所の太郎二郎も、おのづから、氏族の祭に心おごりて、するなるべし。炮烙は、一類もなく、世にかゝづらふほだしももたず、盧同が夜なべに、茶をほうじて、雨夜のすさびに伴ひ、炙甕の豆の、から〳〵と鳴るときは、隣のやもめの耳を悅ばす。いでや、これを荷ふ商人は、程朱の說を聞かざれども、常に身をつゝしみて、細道假橋を、大足に運ばず、市中に股をくゞれども、ふかく、いさかひをたしなめば、馬士船頭の氣隨には似ざらん。なげくべきは、本間の狂言に、鞨鼓と威勢を爭ひ、又は、歐陽公が工夫より、鞠といふものを、尻にぬられて、蠅を取る道具となれるは、おのが心にもあらで、にげなきわざながら、かの足鼎の、酢狂人の鼻を欠かし、石川五右衞門が、釜入より論ずれば、罪は至て輕かるべし。しかるに、和田殿の大磯がよひに、頭巾の名に物すかれてより、今に老人の寵愛にあひて、常にきみがあたまにいたゞかるれば、彼は、藥鑵の下に立んこと、かたくなんありける。

ほうろくや、棚から下りる、秋の暮。

（鶉　衣）

第六章　戲曲及び小說

こゝに戲曲といふは、淨瑠璃本、及び演劇脚本を總稱せるものなり。淨瑠璃の名は、前期の謠ひ物の一なる、淨瑠璃十二段草子より起れるものなり。然して、その曲節は、彼の平家物語、謠曲等より脫化したるものにて、最初は、扇を持ち、案を打ちて謠ひたるが、後には、これと、三絃を合するに至れり。

淨瑠璃の文は、雅俗の中をえて、俗耳に入りやすく、然も、語路の流麗なる所、見るべきものあり。此の作、寬文、延寶の頃、岡清兵衞といふもの、金平本と稱せる短篇を、作れるに始まれりといへども、結構、文章ともに幼稚なりき。元祿のころ、近松門左衞門の出づるに至りて、この文、大に發達せり。

近松門左衞門、氏は橘森、巢林子と號し、京に出でゝ一條家に

仕へ、從六位に叙せらる。後、大に感ずる所ありて、專ら身を文事に委ね、殆ど戯曲作者を以て、終世の業とせり。その著甚だ多く、何れも、纖巧緻密なる筆を以て、よく、人情の至微を描寫せり。中にも、時代物には、國姓爺合戰、世話物には、心中天の網島など、傑作中の傑作と稱せらる。享保九年沒す。年七十二。當時、大坂に竹本義太夫といふものありて、三絃の技に長じ、在來の音曲を折衷して、一家を起せり。門左衛門の淨瑠璃は、おほく、このために、筆を執れるものなりといふ。その後、近松半二、竹田出雲等ありて、世に知らる。

當時、また演劇脚本と稱するものありしが、そは、演劇の筋書にして、始めは、大概、俳優の自作なりしが、寛延以後には、專門の作者出づるに至れり。並木五瓶、鶴屋南北、河竹新七の如き、尤、その名あるものなり。五瓶の金門五三桐、南北の東海道四谷怪談等、傑作と稱せらる。されど、素より淨瑠璃本に比すべきにあらず。

門出八島中の一節　近松門左衛門

斯くて其後夕霞、八島の浦の松暗く、群れ居る鴎立ち騒ぎ、海渡る舟の舵の音、森々として物さびし。ときの聲も矢叫びも、磯打つ波に引き替へて、遷り替れる境界は、明日の身の上思はせし、あはれ催す沖つ風、磯山櫻かつ散るも、心を碎く種となり、いと物凄き浦わかな。

織信が忠勤義經感じ思召し、今一度對面せばや、尋ね來れと、忠信仰を蒙りて、信夫兄弟左右に具し、泣く〳〵御陣を出でけるが、いざ立ち別れ尋ねんと、鹽屋の辻より、主從は三方へこそは別れけれ。

まだ宵闇の鹽曇り、浦さび渡る春の夜は、心ぞ秋の夕なりに、洲崎の堂の西東、牟禮高松の北南、奥州の佐藤殿やおはするか、織信殿やおはするかや、君

よりの御諚にて、弟の忠信が御迎に來りしと、靜に呼うで通れども、應ふるものこそなかりけれ。

今朝は、兄弟連れたりしに、今宵始めて一人行く、八島の波の音までも、昨日に替はる心して、なふ繼信殿兄上と、呼ばんとすれど聲たゝず、峰に響くは松の風、苫屋の方にかすかなる、手負の聲の聞ゆるを、嬉しやそれかと走り寄れば、群れて友呼ぶ妻千鳥、ばつと立つては亂れ行く、後の山に聲するは、信夫がよばうこだまにて、繼信とも佐藤とも應ふるものは無かりけり。

今は力もつき弓の、ゐるかひなさに驅け廻はり、なふ兄上はおはせぬか、繼信殿やおはするかと、聲をはかりに呼び立て〳〵、又伏し沈み歎きけり。

無慘やな繼信は、精兵に炙所を射られ、大事の負傷といひながら、死にもやらず、片われ舟のかた陰に、漂ひ伏して居たりしが、弟のこゑと聞くからに、やう〳〵這ひ出で、忠信かと、聞くも嬉しく走り寄り、未だ存命にてましますかと、絶り付いて抱き起し、額を押へ、御手は如何にと問ひければ、今を限りの繼信は、我身の事は扨措いて、君は如何渡らせ給ふぞや、御身は手をも負はざるか、味方は何程討たれしぞと、絶え行く息の下にさへ、弓矢取る身の一言と、傳へ聞くだに哀れなり。

忠信涙を押へ、君も我等も恙なく、軍は味方の勝利なり、御供申せとの仰なり、具し參らせんと言ひければ、ヲ、嬉し、最期に君を拜し、御前にて死すべきぞ、連れて參れといふ處へ、信夫兄弟驅け來り、とかうしつらひ、洲崎の堂の破れ戸に、繼信を抱き乘せ、先を忠信、あとは信夫が昇きそへて、涙に袂れたど〳〵と、行くや東の山の端に、月ほの〴〵と出にけり。

小說の始めは、すでに平安朝時代にありて、爾來、室町時代に至りては、御伽草子と稱する短篇、頗る世に行はれたり。而して、當期に至りては、その發達著くして、各種の著作續出せり。その種類には、まづ浮世草子、洒落本、人情本、草双子、實錄物、讀本、滑稽本等あり。作者は、元祿以前に、井原西鶴ありて、浮世草子を作り、世の喝采を博したり。その他、やゝ遲れて、洒落本に

は、戀川春町、人情本には爲永春水、草双子には柳亭種彦、讀本には山東京傳、曲亭馬琴、滑稽本には式亭三馬、十返舍一九などゞ、皆有名なるものなり。

浮世草子、洒落本、人情本は、全く當時の浮華驕奢なる風俗を、描寫したるものにて、その書中の骨子とする所、おほく、放蕩無賴の男女ならざるはなく、卑猥なること、殆ど見るに絶えざるものあり。されば當時、風敎を害する甚しかりしを以て、幕府は、一時、この種の小説を禁ずるに至れり。草双子は、前期の御伽草子の流れを、汲みたるものにて、卑近なる事實を記し、專ら、婦女子の嗜好に應じたりしが、晩年に到り、やゝその面目を改めたり。黑本、赤本などいふは、即ちこれなり。柳亭種彦等の出づるに及びては、偐紫田舍源氏などの、大作あるに至れり。又、實錄物と稱するは、歷史上の事實を根據として、潤色したるものにて、頗る世に行れたり。その文章は、やゝ、見るべき點もあれども、洒落本等に比すれば、概して、遜色あるが如し。この種には大閤記、大岡政談等あり。讀本は、實錄物より來りて、大に潤色を加へたるものにて、曲亭馬琴の里見八犬傳等は、即ち、この種の重なるものなり。滑稽本にありては、その脚色、全く諧謔を以て覆はれ、讀者をして、抱腹せしむるものあり。十返舍一九の道中膝栗毛の如き、尤、世に行はれたり。今こゝに、これ等小説作者中、尤も有名なる曲亭馬琴の略傳を掲げん。

馬琴は瀧澤氏、名を解といふ。江戸の人なり。はじめ旗下の士、某に仕へたりしも、意の如くならず。また、醫を學びしも果さ

ず。遂に山東京傳の家に寓して、小說界に身を投じぬ。馬琴、博學にして和漢の書、涉獵せざるなく、殊に、歷史、地理に精通せりといふ。これより先、小說家は、おほく、學識淺薄なりしが、獨り、馬琴は然らず。深遠の學識、縱橫の筆を以てしたれば、その文章の氣骨あること、規模の宏大なること、他に比類なかりき。その著、里見八犬傳は、前後二十八年の、苦心經營になりたるものなりといふ。その他、俠客傳、巡島記等の如き、殆ど三百種を超ゆ。その趣向は、何れも、歷史上の事實によれるものにて、八犬傳は、全く支那の小說、水滸傳に模倣したるものなり。かくて馬琴は、晩年に至り、明を失ひたれども、なほ著書を廢せず、おほく、子婦に口授して、筆記せしめたりといふ。嘉永元年、年八十二にて沒す。その著書中、燕石雜誌、玄同放言、羈旅漫錄等の隨筆あり。以て、馬琴の博覽洽聞の一端を窺ふに足る。

芳流閣の一節

古の人いはずや、禍福は糾へる繩の如し、人間萬事、往くとして塞翁が馬ならぬはなし。そは福の倚るところ、將、禍の伏するところ、彼にあれば此にありとは思へども、豫てより、誰かよくその極を知らん。憐むべし、犬塚信乃は、親の遺言、紀念の名刀、心に占つ、身に傳つ艱苦の中に年を經て、得がたき時を得てしかばはるゝ、滸我へ齎して、名を揚げ家を興すべかりし、その福は禍とふりかはりたる村雨の、及はもとの物ならで、我が身を劈く讎とぞなりし。慨をこゝに釋くよしもなく、緯急にして意外にあり。僅かに、當座の辱を避けばやと思ふばかりに、膠の園を切開きて、芳流閣の屋の上に攀ぢ上れども左右に脫け去るべき道のなければ、其處に必死を極めたる、心の中はいかなりけん想像るだにいと痛ましさ。されば又、犬飼現八信道は、犯せる罪のあらずして、月來獄舍に繫れし、禍は、今恩赦の福、我が縛の索とけて、人にぞかゝる捕手の役義、犬塚信乃を搦めよとて、慾に擇み出されつ、他の

憂き目の面目に、今更用ひられん事、願はしからずと思へども、推辭みて許さるべくもあらぬ、君命おもく彌高き、彼樓閣は三層なり、その二層なる檐の上まで、身を霞ませて登りて見れば、足下遠く雲近く、照る日烈しく堪へがたき頃は六月二十一日、昨日もけふも乾蒸の鐵熱をわたる敷瓦は、凸凹隙なく波濤に似て、下には滔々たる、こゝ生死の海に射る洄潮は、名におふ坂東太郎、水際の小舟楫を絶て、進退既に谷まりし、敵にとあれば、いかでわれ、繫ぎ留めんと、鰈の樹傳ふごとく、さら〳〵と登り果てたる三層の屋背には目柴翳すよしもなく、迭に透を窺ひつゝ、疾視あふて立たる形勢、浮圖の上なる鶴の巣を、巨蛇の窺ふに似たりけり、廣庭には成氏朝臣、横堀史在村等の老黨若黨圍繞せし、床几に尻を打掛て、勝負怎生(イカ)にと向上たり、亦只、閑の東西には、身甲したる許多の士卒、槍長刀を晃かし、或は箭を負ひ、弓杖突立て、組で落ちなば擊留めんとて、頂をそらして之を觀る、加旃外面は連緜として、杳なる河水遶りて砌を浸せば、借使、信乃武事たけ、膂力衰へず、能く現八に捷ち得るとも、墨氏が飛鳶を借らざれば、虚空を翔るべくもあらず、魯般が雲の梯なければ、上地に下るべくもあらず、渠鳥ならずも、羅に入りぬ、獸ならずも、狩場にあり、三寸息絶ゆれば、綽みな休まん、脱れ果てじと見えたりける、當下、信乃の思ふ樣、初層二層の屋の上まで、追登らんとせし兵等を、斫落しつる其後は、絶えて近く者なきに、今唯獨り登來ぬるは、世に覺ある力士ならん、這奴は、これ膳臣巴提使か虎を搏にする男なるか、又富田の三郎が、鹿の角を裂く力あるか、遮莫一箇の敵なり、引組て差違へ、死するに難き事やはある、能き敵にこそござんなれ、目に物見せんと、血刀を、袴の稜もて推拭ひ、高瀨の如き方桿に、立てたる儘に、寄するを俟てば、現八も亦思ふ樣、彼、犬塚が武藝勇悍、素より萬夫不當の敵なり、然れども搦め乘ねて、他の援を借る事あらば、獄舍の中より、此役義に擇出されし甲斐もなし、搦め捕るとも擊るゝとも、勝負を一時に決せんものと思ひにければ、些も擬議せず、御諚ざふと呼かけて、傘たる十手を閃かし、飛ぶか如くに、方桿の左の方より進登りて、組んとすれども寄せつけず、心得たりと鋭き太刀風に、擊つを發石と受け留めて、拂へば透さず込刀尖を、拄て流す一上一下、辷る甃を蹈駐て、頻りに進む捕手の祕術、彼方も劣らぬ手煉の働き、岌より落す太刀筋を、あちこち外す虚々實々、未だ勝負を判かざれば、廣庭なる主從

士卒は、手に汗握らざるもなく、瞬もせず氣を籠めて、見るめもいとゞ迫なる。去るほどに犬塚信乃は、侮り難き現八が武藝に、敵を得たりけりと思へば、勇氣彌増して、刀尖より火の出るまで、寄せては返す太刀音被聴、兩虎深山に挑む時、鈍然として風發り、二龍青潭に入る時、沛然として雲起るも、かくぞあるべき。春ならば峯の霞か、夏ならば夕の虹かと見るばかりなる、いと、高閣の棟にして、死を爭ひし爲躰、世に未曾有の晴業なれば、現八は被籠の鎖、肱當の端を、裏缺く迄に切裂れしかど、太刀を扳かず、信乃は刀の刄も積かで、初めに淺痍を負ひしより、漸々に疼を覺れども、足場を揣て撓まず去らず。疊かけて擊太刀を、現八右手に受流かして、返す拳につけ入りつゝ、やっと被たる聲と共に、眉間を望で破と打つ、十手を丁と受留る、信乃が刄は、傷際より折れて、遙に飛び失せつ、現八、得たりと無手と組むを、そがまゝ左手に引着て、迭に利腕楚と拿り、捩倒さんと、曳聲合して揉つ揉るゝ、力足、此彼齊一蹈乱らして、河邊の方へ滾々と、身を輾ばせし覆車の米苞、坂より落すに異ならず。高低際しき棧閣に、削成たる蕓の勢ひ、止るべくもあらざめれど、迭に拿たる拳を緩めず、幾十尋なる屋の上より、末遙なる河水の底にはいらで、程もよし、水際に繫げる小舟の中へ、打累りつゝ、揑と落れば、傾く舷とたつ浪に、交と音も水烟、纔丁と張斷て、射る矢の如き早河の、眞中へ吐出されつ。爾も追手と引く潮に誘ふ水なる泗舟、往方もしらず成にけり。

（里見八犬傳）

中學 國文學史 終

奈良朝時代著作目表（一）

古事記　三卷　太安麿　元明天皇和銅五年

日本書紀　三十卷　舍人親王　元正天皇養老七年

出雲風土記　一卷　聖武天皇天平五年

萬葉集　二十卷（橘諸兄（大伴家持））（桓武天皇延暦四年）

懐風藻　一卷　淡海三船　孝謙天皇天平勝寶三年

平安朝時代著作目表（二）

物語			
竹取物語	二卷	著者未詳	年代未詳
伊勢物語	仝	仝	仝
大和物語	仝	仝	仝
住吉物語	仝	仝	仝
落窪物語	四卷	仝	仝
とりかへはや物語	仝	仝	仝
濱松中納言物語	仝	仝	仝
空穗物語	二十卷	仝	仝
堤中納言物語	二卷	仝	仝
源氏物語	五十四卷	紫式部	一條天皇長保年中
狹衣	八卷	大式三位	後一條天皇寛仁年中
日記			
蜻蛉日記	八卷	右大將道綱母	圓融天皇天延年中
紫式部日記	二卷	紫式部	一條天皇長保年中
和泉式部日記	一卷	和泉式部	一條天皇長保年中
讚岐典侍日記	二卷	讚岐典侍	堀河天皇寛治年中
土佐日記	一卷	紀貫之	朱雀天皇承平五年
更科日記	仝	菅原孝標女	後冷泉天皇天喜年中
草子及び雜史			
枕草子	三卷	清少納言	一條天皇長保年中
榮花物語	四十一卷	著者未詳	（堀河天皇寛治年中）
大鏡	八卷	藤原爲業	（崇德天皇保延年中）
今昔物語	六十卷	源隆國	白河天皇承暦年中
歌集			
古今集	二十卷	紀貫之等	醍醐天皇延喜五年
後撰集	仝	大中臣能宣等	村上天皇天暦五年
拾遺集	仝	花山院（藤原公任）	一條天皇長德元年
後拾遺集	仝	藤原通俊	白河天皇應德三年
金葉集	十卷	源俊頼	崇德天皇大治二年
詞華集	仝	藤原顯輔	近衛天皇天養元年
千載集	二十卷	藤原俊成	後鳥羽天皇文治元年
新撰和歌集	四卷	紀貫之	醍醐天皇延長四年
堀河院前後百首	六卷	堀河天皇寛治年中 鳥羽天皇永久年中	
續詞華集	二十卷	藤原清輔	二條天皇永萬年中
金玉集	一卷	藤原公任	（後朱雀天皇長久年中）
歌學			
新撰髓腦	一卷	藤原公任	後朱雀天皇長久年中
悅目抄	一卷	藤原基俊	崇德天皇保延年中
無名抄	一卷	藤原俊頼	仝
奥儀抄	三卷	藤原清輔	高倉天皇治承年中
袋草子	四卷	仝	仝
和歌初學抄	仝	仝	仝
袖中抄	二十卷	僧顯昭	（高倉天皇治承年中）
桐火桶	二卷	藤原俊成	安德天皇養和年中
詩文集			
凌雲集	一卷	小野岑守	嵯峨天皇弘仁年中
文華秀麗集	仝	仲雄王等	仝
性靈集	十卷	僧空海	嵯峨天皇弘仁年中
經國集	六卷	淳和天皇天長四年	淳和天皇天長四年
都氏文集	一卷	都良香	陽成天皇元慶年中
菅家文草	十二卷	菅原道眞	醍醐天皇昌泰年中
本朝文粹	十五卷	藤原明衡	一條天皇永祚年中
續本朝文粹	十三卷	藤原季綱	年代未詳
和漢朗詠集	二卷	藤原公任	後朱雀天皇長久年中
朝野群載	二十三卷	三善爲康	崇德天皇保延年中
新撰朗詠集	二卷	藤原基俊	崇德天皇保延年中

鎌倉時代著作目表（三）

戰記及び雜史類

保元物語	三卷	葉室時長	年代未詳
平治物語	三卷	仝	仝
平家物語	十二卷	著者未詳	後深草天皇建長年中
源平盛衰記	四十八卷	仝	年代未詳
水鏡	三卷	中山忠親	（後鳥羽天皇建久六年）
今鏡（續世繼）	十卷	著者未詳	（土御門天皇正治元年）
宇治拾遺物語	十五卷	著者未詳	年代未詳
古今著聞集	二十卷	橘成季	後深草天皇寶治二年
十訓抄	三卷	著者未詳	仝
沙石集	十卷	無住法師	後宇多天皇弘安年中
寶物集	七卷	平康頼	後鳥羽天皇治承元年
愚管抄	七卷	著者未詳	同

和記紀行隨筆物語類

十六夜日記	一卷	阿佛尼	後宇多天皇建治三年
弁内侍日記	二卷	弁内侍	（龜山天皇文永二年）
中務内侍日記	一卷	中務内侍	年代未詳
海道記	一卷	源光行	順德天皇承久三年
東關記行	仝	源親行	年代未詳
方丈記	一卷	鴨長明	（後鳥羽天皇建久九年）
四季物語	一卷	鴨長明	仝
撰集抄	九卷	仝	仝
秋の夜長物語	一卷	著者未詳	年代未詳
唐物語	仝	仝	仝

日歌集及び歌學書

新古今集	三卷	藤原定家等	土御門天皇元久二年
新勅撰集	二十卷	藤原定家	後堀川天皇貞永元年
續後撰集	仝	仝 爲家	後深草天皇寶治二年
續後拾遺集	仝	仝 基通等	龜山天皇文永二年
續古今集	仝	仝 爲氏	後宇多天皇弘安二年
續拾遺集	仝	仝 爲世	後伏見天皇正安三年
新後撰集	仝	仝 爲兼	花園天皇正和二年
玉葉集	仝	仝 爲世	仝天皇文保二年
續千載集	仝	仝 爲藤	後醍醐天皇正中二年
續後拾遺集	仝	源實朝	順德天皇承久元年
金槐集	三卷	僧慈鎮	後堀川天皇嘉祿元年
拾玉集	七卷	僧西行	後鳥羽天皇建久九年
山家集	二卷	藤原家隆	四條天皇嘉禎三年
壬二集	三卷	後京極攝政良經	土御門天皇建久元年
月清集	四卷	藤原定家	四條天皇仁治二年
詠歌大概	一卷	鴨長明	後鳥羽天皇建久九年頃
無名抄	二卷	鴨長明	順德天皇
八雲御抄	六卷		